

南屏山興教寺摩崖、家人卦中庸大學篇、司馬溫公の筆、錢唐は五季より以來干戈の禍無く、その民富麗にして淫靡の風多く家を齊ふるの道或は闕く。故に溫公これを書して以て風教を助く、偶然これをなすに非ざるなり。

炭谷に溫公の二十八字あり。

溫公通鑑の書藁は作字方整、未だ嘗て縱逸の態をなさず、宜なりその十有九年にして始めて克く書を成せるや。

○蘇軾(宋) 蘇軾字は子瞻、眉州眉山の人、文安簿洵の仲子なり。嘉祐二年禮部に試みらる、主司歐陽脩曰く、吾當さに此人の一頭地を出づるを避くべしと。熙寧中黃州團練副使を以て安置す。室を東坡に築き自ら東坡居士と號す。哲宗の時端明殿翰林侍讀學士禮部尙書を兼ねぬ。文忠と謚す。

弟蘇轍の記せる亡兄東坡の端明墓誌銘に云ふ、幼にして書を好み老いて倦まず、自ら言ふ晉人に及ばざるも、唐の褚薛顏柳に至ては髣髴之に近しと。

山谷集に曰く、東坡少き日蘭亭を學ぶ、故に其書姿媚徐季海に似たり。酒酣に至りて放浪、意工拙を忘る、字特に瘦勁柳誠懸に似たり。中歲喜んで顏魯公楊風子の書を學び

其の合するところ李北海に減ぜず。本朝の善書自ら當さに推して第一と爲すべし。

東坡の書眞行相半す、便ち羊欣、薄紹を去る遠からざるを覺る。

蘇文忠公自ら謂ふ、大字を作るは小字に如かず。

東坡弟の子由と書を論じて云ふ、吾書を善くせずと雖書を曉ること我に如く莫し、苟も能く其意に通ぜば常に學ばすと謂ふも可なりと。故に其子叔黨公の書に跋して云ふ、吾先君子豈書を以て自ら名とせん哉、特に其至大至剛の氣胸中に發するを以て、而して之に應ずるに手を以てす、故に其刻畫嫵媚の態あるを見ず、而して端乎たる章甫犯す可らざるの色あるが如し。少年にして二王の書を喜び、晩年には乃ち顏平原の書を喜びり。

故に時に二家の風氣あり。俗手知らず妄りに徐法を學ぶと謂ふは陋なり矣と。此を觀れば則知る、初めより未だ嘗て規規然として翰墨の積習に出づるにあらざるを。

蘇子瞻一日學士院に在りて閑坐す、忽ち左右に命じ紙筆を取り、平疇交遠風、良苗亦懷新の兩句を寫し、大書小楷行草書凡そ七八紙を寫し、筆を擲ち大息して曰く、好好其紙を左右給事に散ぜよと。

魯直黃庭堅東坡に戯れて曰く、昔王右軍の字鸞に換ふるの字と爲る、韓宗儒公の一帖を得る毎に、殿帥姚麟の許に於て羊肉數斤に換ゆ、君の書を名けて羊肉に換ゆるの書と爲す可し。

崇觀の間、蔡京蔡卞等事を用ひ東坡を拘するに黨籍を以てし、其文辭墨迹を禁じて之を毀つ。政和の間忽ち其禁を弛し蘇の墨迹を求むる甚だ鋭し。時に徽宗寶籙宮に親臨して醜筵す。道流帝の章を拜し地に伏して曰く、奎宿(星の名)乃ち本朝の蘇軾と、上大に驚き其詞翰を見んと欲す。

○黃庭堅(宋) 黃庭堅字は魯直、洪州分寧の人なり。進士に擧げられ、熙寧の初、國子監留守と爲る。哲宗召して校書郎と爲す。徽宗位に即き、吏部員外郎に起す。草書を善くし楷法亦自ら一家を成す。自ら山谷道人と號す。

庭堅云ふ、余草書を學ぶ三十餘年、初め周越を以て師と爲す、故に二十年抖擻の俗氣を脱せず、晩に蘇才翁子美の書を得て之を觀、乃ち古人の筆意を得たり。其後又張長史僧懷素、高閑の墨蹟を得、乃筆法の妙を窺ふと。

洞天清錄に曰く山谷が懸腕の書深く蘭亭の風韻を得。然れども行は眞に及ばず、草は

行に及ばず。

王榮老江を渡らんと欲す、七日風起りて濟るを得ず。父老曰く公篋中必ず寶物を蓄へん、江神極めて靈なり、當に之を獻すべし。榮老顧ふに有る所無し、たゞ玉塵尾あり乃ち之を獻す、凡故の如し、又端硯を以て之を獻す風愈作る、又宣包虎帳を以て之を獻す皆驗あらず。夜臥し念ひて曰く、黃魯直が扇頭に草獻せる章應物の詩あり。持し以て之を風す、香火未だ收らざるに天水相照し、南風徐に來る。一餉して濟る。

本朝書を以て名家たる者、黃太史米儀曹に至て各書法の變を得、自ら一家を成す、未だ優劣し易からず。

○米芾(宋) 米芾字は元章、吳人なり。その母宣仁后の藩邸に侍するの舊恩を以て、涪光尉に補せらる。知雍血縣、漣水軍、太常博士、知無爲軍を歴、召して書畫學博士と爲し、謁を便殿に賜ふ。其子友仁が作る所の楚山清曉圖を上る。禮部員外郎に擢んでられ、出て淮陽軍に知たり。翰墨に妙に、沈著飛翥、王獻之の筆意を得、最臨移(工)にして、眞を亂り辨すべからざるに至る。鑒裁に精しく、古器物舊畫に遇へば、則極力求め取て必ず得たり。嘗て詔を奉じ黃庭の小楷に倣ひ、周興嗣の千字韻語を作る。又宣和殿

に入り禁内の所藏を觀る。人以て寵と爲す。

米芾の書藝之を學び、篆は史籀を宗とし、隸は師宜官を法とす。晚年出入規矩あり。自ら謂ふ、書を善くする者只一筆あり、我獨り四面ありと。寸紙數字、人争うて之を售ひ以て珍玩と爲す。碑榜を請求する戸外の屢常に家に滿つ。古帖を藏する甚だ富み、其藏する所を名けて寶晉齋と爲す。

南宮、もと顔を學び後自ら一家を成す。側掠拿趨に於て悉く古法度に遵ひ、一筆の妄作無し。

元章初め羅讓の書を學び、其後超邁神に入り、殆んど側勒弩趨策掠墜磔の能く束縛する所に非ざるなり。

婢の婢、世に之を重臺と謂ふ。書を詳する者はいふ、羊欣の書は婢の夫人を學ぶに似たり、米芾羊欣が書を學ぶ、故に高宗米が字を謂て重臺と爲す。

海岳(元章の號)書學博士を以て召し對せらる。上本朝書を以て世に名ある者凡そ數人を問ふ。海岳各其人を以て對て曰く、蔡京は筆を得ず、蔡卞は筆を得て而かも逸韻に乏し、蔡襄は勒字、沈遼は排字、黃庭堅は描字、蘇軾は畫字なり。上復問て曰く、卿の書は如何、對て曰く臣の書は刷字なり。

米芾書名あり、其投筆能く管城子を盡す。五指之を撮て勢翩翩として飛ぶが如く、結字殊に飄逸、而して法度を少く、其得意の處大に李北海に似たり、間々能く合ふ者は時に小王の風味を竊むなり。魯公(京)一日芾に問ふ、今書を善くする者幾人ある。芾對て曰く、晚唐柳氏より近時公家の兄弟是なり。蓋魯公と文正公(卞)とを指すのみ。公更に其次を詢ふ、則曰く芾なり。

米芾能書の名を得、海内に負ふ無きに似たり。芾眞楷篆隸に於て甚だ工ならず、たゞ行草に於て誠に能品に入る。以ふに芾六朝の翰墨を收め副うて筆端に在り、故に沉著痛快、駿馬に乗て進退するが如く、裕なること鞭勒を須ひずして人意に當らざる無きが如し。

米元章の書畫奇絶、人に從て古本を借り自ら臨榻す、臨し竟て臨本眞本と併せて其家に還し自ら其一を擇ばしむ、而して其家辨する能はざるなり。此を以て人の古書畫を得る甚だ多し。

徽宗嘗て米芾に命じ、兩韻の詩を以て御屏に草書し、次韻は乃ち中字を押さしむ。行

筆上より下に至り其直きこと線の如し。上稱賞して曰く、名下虛士無しと。芾即用ゆる所の硯を以て懐に入る、墨汁淋漓たり奏して曰く、硯臣下の用を經たり敢て復進御せず、臣敢て拜賜すと。又一日人に回するの書、親舊密かに窺隙に於て其寫を窺ふあり、芾再拜に至り即筆を案に放ち、襟を整へ下つて兩拜す。

容臺集に曰く、米に正書無し、眞行なる者を正書と爲す。生平小楷を自負し肯て多く寫さず。余李伯時が西園雅集圖を得、米南宮の蠅頭の題あり。後甚だ蘭亭の筆意を得。

○宋の徽宗 徽宗諱は佶、神宗の第十一子なり。

政和七年國子監辟雍に於て大成殿の額に親書す。宣和四年祕書省に幸し、御書の千文十體書洛神賦行草近詩を宣示す。

帝の御府に儲ふる所の書は、其初めに必ず御筆の金書小楷の標題あり。

子漑小鐵錢を鑄んことを請ひ、範格に因し以て進む、帝大に悦び宣和通寶の四字を親書して錢文となす。

帝は黃庭堅の書體を學び、後に自ら一法をなす。

帝の行草正書筆勢勁逸なり。初め薛稷を學び其法度を變じ自ら瘦金書と號す。

○超明誠(宋) 金石錄三十卷を著はす、歐陽脩の集古錄の例に仿ひ、編排して帙を成す凡そ目錄十卷、跋尾二十卷、紹興中其の妻李清照上表して朝廷に獻る。

○張商英(宋) 張丞相字は天覺一日句を得筆を素めて疾書す、龍蛇飛動す、姪をして之を謄寫せしむるに、波險なる處に當つて姪惘然として止め問うて曰く、此れ何の字ぞと丞相熟視して曰く胡ぞ早く問はざる予を忘るゝに致すと。

○米友仁(宋) 米友仁字は元暉、芾が子なり、力學古を嗜みまた書畫を善くす、世に小米と號す、仕へて兵部侍郎敷文閣學士に至る。

父の元章曰く、吳峴王の子詔、大隸にて榜に題す古意あり、我が兒友仁大隸の題榜もこれと等しと。

元暉が書その父に及ばずといへども、然かも王家謝家の子弟の如く、自ら一種の風格あるなり。

○黃伯思(宋) 黃伯思字は長睿、邵武の人、元符三年進士高等、古文奇字を好む。京洛公卿の家、商周秦漢の彝器の款識字畫を研究し、體制悉く能く辨じ、是非を正し本末をいひ、遂に古文を以て名家たり。初め淳化中博く古法書を求め、待詔王著に命じて正

法帖を續ぐ。伯思その乖謬龐雜を憂ひ刊誤二卷を作る。篆隸正行草章草飛白皆妙絶に至る。その尺牘を得る者多くこれを藏弁す。著述の功を以て朝列に升り祕書省校書郎より祕書郎に遷る。自ら雲林子と號し別字は霄賓、政和八年卒す。二子あり、詔して伯思が平日の議論題跋を集め東觀餘論三卷を作る。

伯思が東觀餘論に曰く、僕弱齡より篆法を喜び、始め泰山の秦刻及び朝那の石章を得これを學びて後に岐鼓壇山字及び三代の彝器文識を得またこれを學べり。その高古を仰いで唯是をこれ師とす。而して漢魏の碑首印章もまた時に寓目すれども、これより下る者は未だ嘗て往つてこれを問はずと。

伯思が文辭雅健、格高うして思深し、詩は俊逸清新にして古作を追ふものなり。尤も小學に精しく、凡そ字書討論備さに盡せり、正行草隸皆精絶、初め顏柳に倣ひ後は乃ち鍾王を規摹す、筆勢簡遠にして魏晉の風氣あり。

○薛紹彭(宋) 薛紹彭字は道祖、恭敏公向が子、翰墨の名あり。米芾曰く、薛紹彭は書畫を以て情好相同じ、嘗て書を寄せていふ、書畫の間久しく薛米を見すと、余答ふるに詩を以てす、曰く、世に言ふ米薛或は薛米、猶弟兄といひ兄弟といふが如しと。

紹彭が書眞行法を作る、皆自ら晉唐なり、絶えて側筆の惡態を作らずと。

○范成大(宋) 范成大字は致能、吳郡の人、紹興二十四年進士の弟に擢でられ、孝宗の時參知政事を拜し、資政殿學士に進み大學士を加ふ。文名あり尤も詩に工みなり、自ら石湖と號す。

石湖能書を以て稱せらる。黃庭堅米芾を宗とし遶勁見るべし。

○朱熹(宋) 朱熹字は元晦、一字は仲晦、徽州婺源の人、紹興十八年進士の第に中り光宗の時煥章閣待制に除す。諡して文といふ。太師を贈り徽國公に封す。

晦翁の書筆勢迅疾、嘗て工を求むるに意無し、然かもその點畫波磔を尋ぬるに一として書家の規矩に合せざる無し。

詹氏小辨に曰く、嘗て朱子の竿牘數張を見る、蓋し魯公の争坐を法とす。即ち行邊添注また復た宛然たり。意致蒼鬱、沉深古雅、骨あり筋あり韻あり、しかも書を以て顯れず、因に學を以てこれを掩へるなり。

朱子の書、榜額の外多く見ず、端州友石臺の記、鍾太傅の法に近し、亦復た分隸の意あり。子讀書の二大字を書す、長樂方安里三寶巖に在り、容膝の二字、天光雲影の四字は

雲谷に在り、光風霽月の四字は南康白鹿洞に在り、脫去凡近の四大字は瑞州府學にあり、上帝臨汝無貳爾心の八大字は撫州府學に在り。

○姜夔(宋) 姜夔字は堯章、番易の布衣なり。自ら白石生と號す。學を好んで通ぜざるところなし。朝に請ひて頌臺の樂律を正さんと欲す、議合はずしてやむ。大樂議琴瑟攷僞歌等あり。書世に傳はる。運筆遒勁、波瀾老成、續書譜一卷を著せり。議論精到、用志刻苦、筆法能品に入る。

趙子固、姜堯章を目して書家の申韓とす。

姜白石が書法廻かに脂粉を脱し、塵俗を一洗す。

○黨懷英(金) 黨懷英字は世傑、馮翊の人、大定十年進士の第に中る。能く文を屬し篆籀に工みなり、當時第一と稱し、學者これを宗とす。翰林學士承旨となる。文獻と謚す。

黨懷英が篆籀神に入る。李陽冰が後一人のみ。嘗ていふ、唐人韓蔡は字學に通ぜず、八分は篆籀中より來ると。故に懷英が書、上は鍾蔡に軋りその下は論ぜざるなり。小楷は虞褚の如く、また中朝第一とすべし。書法は魯公を以て正しとし柳誠懸以下を論ぜ

す。

○王庭筠(金) 王庭筠字は子端、河東の人、大定十六年進士の第に登る。官に就きて罷め彰徳に卜居し、田を買ひ黃華の山寺に讀書す、因自ら號とす。又召れて翰林文字となり、祕書郎張汝方と共に命をうけて法書名畫を品第す。翰林修撰に遷る。書法は米元章を學び趙鳳趙秉文と俱に名家なり。

庭筠は米南宮の甥、その書法を子の曼慶(號淡游)に傳へ張天錫(錦溪老人、草書韻會の著あり)に至る。

庭筠が書法沉頓雄快、南宋の諸老と各南北に行なはる。

○趙孟頫(元) 孟頫字は子昂、自ら松雪道人と號す。宋の太祖の子秦王德芳の後なり。四世の祖伯圭第を湖州に賜ひ、湖州の人と爲る。幼にして聰明書を讀み目を過ぐれば輒ち誦を成す、文を爲るに筆を操れば立るに就る。至元年間遺逸を搜訪し具部郎中を授かり、集賢直學士に遷る。延祐三年翰林學士承旨榮祿大夫に拜す。帝嘗て侍臣と文學の士を論じ、孟頫を以て唐の李白、宋の蘇軾に比す。魏國公に封じ文敏と謚す。孟頫篆籀分隸眞行草書古今に冠絶せざる無し。遂に書を以て天下に名あり。天竺に僧あり、數

萬里より來り其書を求めて歸り、國中之を寶とす。

公性書を善くし専ら古人を以て法と爲す。篆は則石鼓詛楚を法とし、隸は則梁鶴鍾繇を法とし、行草は則逸少獻之を法とし、雜ふるに近體を以てせず。

魏公の書凡そ三變す、初め思陵を臨し、中ごろ鍾繇及羲獻諸家を學び、晩に李北海を學ぶ。

鮮于樞云ふ、子昂篆隸正行顛草當代第一と爲す、小楷又子昂諸書の第一と爲す。

張伯雨、子昂の過秦三論に跋して曰く、後世誰か知らん公の落筆風雨の如きを、と蓋し昂一日能く一萬字を書せしなり。

子昂始め張即之(南宋の人)に事へ南宮の傳を得、而して天資英邁積學功深く、盡く古人を掩ひ魏晉に超入す。當時翕然として之を師とす。康里子山は其奇偉を得、浦城の楊仲弘(載)は其の雅健を得、清江の范文白公は其の灑落を得、仲穆其の純和にいたる。

○康里巎巎(元) 康里巎巎字は子山、博く群書に通じ、集賢の待制を授けらる。順帝の時翰林學士承旨となる。眞行草書を善くす。識者謂ふ、晋人の筆意を得たりと。單牘片紙も人争ひて之を之を寶とし金玉も嘗ならず。文忠と謚す。

子山翰墨に刻意し、正書は虞世南を師とし、行草は鍾繇王羲之を師とし、筆畫遒媚轉摺圓勁、名一時に重し。評者謂ふ、國朝書を以て世に名はるゝもの、趙魏公(子昂)より後は便ち公に及ぶなりと。

子山嘗て客に問ふ、一日能く幾字を寫し得るや、客曰く、趙學士は一日萬字を寫すべしといへりと聞けり、子山曰く余一日に三萬字を寫す、未だ嘗て力倦みて筆を輟めたる事あらずと。

子山が書大令(王獻之)より來り、旁ら米南宮に及べり、神韻愛す可し。

○鮮于樞(元) 鮮于樞字は伯機、困學民と號す、漁陽の人、官は太常寺典簿に至る、酒酣なれば醵放詩を吟じ字を作る、奇態横生、行草を善くす。趙子昂極めてこれを推重す。小楷は鍾繇に類す。

鮮于公早く書を學んで未だ能く古人の如くならざるを愧づ、偶々野に出で淖泥の中に二人車を輓き行くを見、遂に書法を悟れり。

王庭筠名を金に擅にし子の澹游(一に)に傳へ張天錫に至る、元初鮮于樞これを得たり。

鮮于困學多く草書を作る、その書眞行より来る、故に落筆苟もせず、しかも點畫到るところ皆意態あり。

書法は宋季に散り、元に振興せり、中に趙子昂鮮于樞を以て巨擘とす。元の世を終るまでこの兩家を出入するのみ。

○吾丘衍(元) 吾丘衍字は子行、太末の人錢塘に家す。古學を嗜み經史百家の言に通じ、篆籀に工みにその精妙は秦唐二季の下に在らず、性放曠檢束を事とせず、左目は眇にして右足は跛なり。しかも風度特に溫籍、常に郭忠恕を以て自ら比す。自ら貞白處士と號す。その著に周秦刻石音釋學古編あり。篆籀の學は宋の季に至りてその弊極まれり、子行始めてその説を唱へて以て古に復す、しかも趙文敏公實にこれに和す。その學は明朝に傳はり、世に名はるゝもの。

○柯九思(元) 柯九思字は敬仲、台州仙居の人、文宗に潛邸に遇ひ、即位するに及び奎章閣に置き、特に學士院鑒書博士を授く。凡そ内府所藏の法書名畫は皆鑒定を命じ牙章を賜ふ。又善く金石鼎彝の器を鑒識す、時に吳人陸友博物と號せられたるも、また歌じて及ばすとせり。

柯九思詩文を能くしまた書を善くす。

○楊維禎(元) 楊維禎字は廉夫、鐵崖と號す、會稽の人。進士の第に擢でられ天台尹に署し江西儒學提舉に升る。地を富春山に避け錢塘に徙る。張士誠累りに之を招くも往かず、行草書は未だ格に合はずといへども、自ら清勁喜ぶべし。

鐵崖は書を以て名れず、矯傑横發その人となりを稱せらる。

○倪瓚(元) 倪瓚字は元鎮、無錫の人、強學好修、性雅潔なり。居る所に閣あり清閣と名づく、喬木修篁蔚然として深秀なり、故に自ら雲林と號す。雅趣吟興發する毎に籟素に揮ふ。蒼勁妍潤も清致を得たり。晩年益々恬退に務め、黃冠野服して湖山の間に浮遊せり。

甫田集に曰く、倪先生人品高軼、その翰札突々として晋宋人の風氣あり。

雲林が書王獻之を師とし一點の俗塵無し。

○宋濂(明) 宋濂字は景濂、浦江の人、吳萊に學び文章に名あり。太祖既に婺を下し聘して教授とす。帝或時文を作り濂を榻下に坐せしめ、口授してこれを書かしむ。洪武九年翰林承旨を授く。少より老に至るまで未だ嘗て去らず。その書豊體なり。能く一黍

に十餘字を作れり。

郎仁寶云ふ、公が草書は龍盤鳳舞の象あり。

六研齋筆記に曰く、唐宋の名公ともに行草を以て場を擅にす、昭代細楷に精しきもの
宋景灑一人のみと。

○宋璫(明) 宋璫字は仲珩、宋濂が次子にして官は中書舍人たり。篆隸眞草の書に精
し。嘗て梁の草堂法師の墓篆、及び吳の天璽中皇象書の三段石刻を見て寢食を忘るゝに
至り、遂に筆法を悟る。小篆の工みなるは國朝第一とす。濂その佳處を見る毎に便ち曰
く、老夫が名を寫し以て世に傳ふるに足れりと。

太祖曰く、小宋が字畫遁媚、美女の花を簪すが如しと。その大小二篆、純熟姿媚、行
書また氣韻あり。

方孝孺曰く、近代草書を能くする者、趙公子昂なり、公が敬ふところの者は鮮于公伯
機なり。稍後に名を得る者を康里公子山とす。この三公に繼いで作る者は金華の宋仲珩
なり、その草書は天驥の中原を行くこと一日千里、澗を超え險を渡りて氣力を動かさ
るが如し。蹤跡すべからざるが如しといへども、而かも馳驟必ず程短に合へり。直ちに

鮮于康里を凌跨すべし。論公をして見せしめば必らず起予の歎あらんと。

六研齋筆記に曰く、仲珩が筆法、沉頓雄快にして篆籀急就の能を兼ね、驟かに旭素を
獨歩せしめざるなりと。

○陶宗儀(明) 陶宗儀字は九成、黃巖の人、少にして進士に擧げられ一たび中らず、
即ち棄去りて古學に務め窺はざるところ無し。尤も字學に刻志す。兵を避けて涪城の北
泗水の南に家し、門を閉ぢて書を著す、書史會要九卷あり。

○解縉(明) 解縉字は大紳、吉水の人、洪武二十一年の進士、中書庶吉士を授く、文
皇即位して召して左右に置き、侍讀學士に進む。その文雅勁奇古、司馬遷、韓退之に逼
り、詩は豪宕豊贍、李杜に似、書は小楷精絶、行草皆佳なり、天子その楷書を愛惜して
親らこれが爲に硯を持つに至れり。

農家に陸穎なる者あり、善く筆を結ぶ、縉佳書を作らんと欲すれば必ず穎が筆を得た
り。永樂の時能書の人多し、解縉首たるべし。

王世貞曰く、縉が狂草一時に名あり、然かも縱蕩にして無法、正書は頗る精妍なり
と。

○楊士奇(明) 楊士奇、初め寓を名とす、字を以て行はる。泰和の人、建文の初め名儒を以て徵せられ教職を授かる。累進して華蓋殿大學士に至り、太師を贈られ謚して文貞といふ。

藝苑卮言は曰く、士奇行草を善くす、筆法古雅、しかも風韻少し。

○陸友仁(明) 陸友仁、名は輔、友仁は字なり、華亭の人、沈粲が弟子なり、楷書を善くす、官は中書舍人、禮部主事に遷る。

○姜立綱(明) 姜立綱字は廷憲、瑞安の人、七歳にして書を能くするを以て翰林陀秀才となす。後官を歴て太常少卿たり。楷書を善くし清勁方正、中書の科寫制誥悉く之を宗とす。

立綱が書體、自ら一家を成す、宮殿の碑額多くその筆に出づ。日本使を遣して高さ十三丈の門に扁を求む、立綱爲にこれを書す。その國人常に自ら誇りて曰く、これ中國我に至寶を惠めるなりと。法書天下に行はれ稱して姜字といふ。

藝苑卮言に曰く、立綱小しく二沈を變して方整をなす、その體中にありては工みなること至れりといふべし。而かも俗累を免れずと。

○陳獻章(明) 陳獻章字は公甫、新會の人、白沙村に居る、人稱して白沙先生といふ。英宗の朝に郷試に中り二度禮闈に赴いて第せず、吳聘君に従ひ伊洛の學を講ず。憲宗の時翰林檢討を授く。能く古人數家の字を作る、山居して筆或は給せず、茅を束ねて筆に代ふ、晩年専ら之を用ひ遂に自ら一家を成す、時に呼んで茅筆字と呼び、その片紙を得るも藏して家寶とす。交南の人これを購ふに一幅毎に絹數疋と易へたり。

○李東陽(明) 東陽字は賓之、茶陵の人、四歳にして能く大書す。景帝召して之を見、膝に置いて寶鑑を賜へり。天順八年の避士に擧げられ編修を授けらる、後に太子太保、戸部尙書、謹身殿大學士に升り、太師を贈られ文正と謚す。

涯翁の篆は古隸に勝り、古隸は眞行草に勝る。その草書筆力矯健一家をなし、小篆は清勁妙に入れり。

○吳寬(明) 吳寬字は原博、成化八年の會試に第一人となり、試大廷に又第一となり翰林修撰となる。太子太保を贈られ文定と謚す。文を作るに追琢を事とせず、獨り體裁を嚴にす。詩を作るに深著高壯、近世尖新の習を一洗す。書を作れば姿潤の中時に奇偶を出す、蘇に規模すといへども而かも多くは自ら得るところなり。

○李應禎(明) 李應禎、名は璧、字を以て行はるゝを以て更に貞伯を字とす、長州の人、景泰四年郷試に擧げられ太學に入り中書舍人となる、弘治中太僕少卿たり。博學にして古を好み篆楷俱に格に入る。

文徵明曰く、家君寺丞太僕にある時、公は少卿たり、徵明同寮の子弟たるを以て朝夕左右に給事することを得、承るところの緒論多しとす。公一日魏府君碑を書けり、徵明を顧みて曰く、吾書を學ぶこと四十年、今始めて得るところあり、然かも老いて益無し子はそれ目力壯なる時に之をなせと。因て書の要訣を極論して數百言を累ねたり。凡そ指を運らし思を凝らし、筆を吸ひ墨を濡ほすこと、字の起落、轉換、小大、向背、長短、疎密、高下、疾徐と法あらざるなし。蓋し公心を古法に潛むといへども、而かも自ら得るところ多し、當に國朝第一とすべし、その尤妙、能く三指尖を筆に搦み虚腕疾書せること今人の及ぶこと能はざるところなり。

少卿の書、人の求むる者あれば多くは怒つて應ぜず、故を以て世に傳ふるもの少し。その眞行草隸、皆清潤端方その人と爲りの如し。

○王守仁(明)

王守仁字は伯安、餘姚の人、弘治十二年の進士なり。正徳中僉都御史

となる。同十四年南昌を攻めて反將宸濠を擒にし、新建伯に封ぜられ、南京兵部尙書となる。文成と諡す。

徐渭文長集に曰く、古人論じて右軍は書を以てその人を掩へりとす、新建先生は乃ち然らず、人を以てその書を掩へり。

新建行書を善くす、聖教序より出で右軍の骨を得たり、たゞ波豎の法、張南安、李東陽が法を脱せざるのみ、然かも清勁絶倫なり。

○祝允明(明) 祝允明字は希哲、長州の人、武功伯徐有貞の外孫にして太僕少卿李應禎が婿なり。生れながらにして右の手指に枝あり、因て自ら枝指生と號す。學人を以て興寧の令となり、應天政通判に遷る。幾くもなく乞ひて歸る。その書晉魏に出入し、晚年益々奇縱、國朝第一とす。

文徵明曰く、吾郷の前輩、書家として先づ武功伯徐公を稱し、次を太僕少卿李公とす李の楷法は歐顔を師とし、徐公の草書は顔索より出づ。枝山先生は武功の外孫、太僕の婿なり、早歳にして楷筆は精謹、寔に婦翁を師とす、而かも草法は奔放、外大父より出づ。蓋し二父の美を兼ねて而かも一家を成す者也。李公嘗て余が爲めにいへり、祝婚が

楷筆は嚴整にして姿態少しと。蓋し晩年の作を見るに及ばざるが故のみ。

希哲が書學精工、急就より以て虞褚に及ぶ上下數千年、變體得ざるなし、その結構は羲獻が眞行の如く、懷素が狂草は尤も筆妙に至れり。

○文徵明(明) 文徵明名は璧、字を以て行なはるゝを以て更に徵仲を字とす。長州の人、世々衡山に住するを以て衡山居士と號す。貢して京師に至り翰林待詔を授けらる。少にして書に拙なり、刻意臨學、また宋元を規模とせるも既にして筆意を悟り遂に悉く捨て去り、専ら晋唐を法とす。その小楷は黃庭樂毅中より來るといへども、溫純精絶、虞褚以下は論ぜざるなり。隸書は鍾繇を法とし一世に獨歩す。平生趙文敏公を慕ひ、事毎に多くは之を師とす。論者はいふ、詩文書畫趙と同じといへども、その出處純正なる或は之に過るが如しと。

徵明はじめ郡學に遊ぶ、時に學官嚴に諸生を勵束し、曉は色を辨するを待ちて入り、夕は燈を掲げて散す、諸生皆飲食放歌遊技して日を消せり、徵明獨り千文を臨寫し、日に十本を以て率となす、書遂に大に進む。

公が書に於ける未だ嘗て苟もせず、人の札に答ふるにも、少しく意に満たざれば必ず

再三これを易へて厭はず、故に愈老いて愈益精妙にして、細きこと豪髮に入るものあり。或はその草次應酬を勸む、曰く、吾これを以て自ら娛む、人の爲にはあらざるなりと。李文成公東陽は篆を以て自負せり、公の隸を見るに及んで曰く、我の篆と文生の隸とは以て加ふるなしと。

藝苑卮言は曰ふ、徵明常に隸法に自負し、則ち古人を尙ばず、しかも篆に拙なり、然れども余その千文一本を得たるに、亦子昂が堂廡に在るなり。

○徐霖(明) 徐霖字は子仁、南京の人、篆は神品に登る。餘の眞行の如きも皆精妙に入れり。碑版の書は顏柳を師とし、題榜大書は詹孟舉を師とし、並に海内に絶す。日本の使者これを得れば什襲して珍とせり。武宗南巡して召して行宮に見、二度その宅に幸せり。子仁もと長髯あり、武宗手づから文を剪り拂ふを作る。因て自ら髯翁と號す。

藝苑卮言に曰ふ。霖は好んで堆墨書を作る、神采爛然たりと。

徐子仁九歳にして大書を作る。筆を操つて體を成す。正書は歐顔に入り、大書は初め朱熹を法とし、殆どその眞を亂る、後は趙子昂を喜び、筆力遒勁、布構端飭、一家の書をなせり。篆字に至つては法を異人に得、更に閩奥に至れり。李西涯と喬伯巖時に篆聖

と號す。見て則ち及ばずとせり。

篆法久しく微にして周伯琦より後、たゞ李東陽遠くその緒を續げり、霖は躬ら堂室に詣り蚤尙雄麗、晩年益樸古にして殆ど神品に登れり。

○陸深(明) 陸深字は子淵、儼山と號す、華亭の人。弘治十八年進士に舉り、嘉清中詹事となる。致仕し禮部侍郎を贈られ文裕と謚す。書法妙にして鍾王に逼り、趙松雪(子昂)に比して遒勁これに過ぐ。

陸公行狀に云ふ、國初我が松江多く書學を以て天下に名はるゝ久し、已にして響を絶つ、公近ろ舊起し遂に前人を凌いでその上に處す、張電(字は文光、號眞山)書學を以て際遇するも、實は公が指授するところに出づ。識者いふ。公は趙文敏後の一人と、諛詞にあらざるなり。

莫廷韓集に曰く、陸文裕自らいへり、吾子昂と同じく北海(李邕)を師とす、海内の人我を以て法を趙に取れりとすと。是れ意に趙を重んぜざるなり。その風力を論ずれば、實に吳興(子昂)の上に出づるなりと。

陸深、卒爾に應酬の字を作るといへども、また苟しくもせず、曰く、これも即ち字を

學ぶなり、何ぞ放過するを得んと。

雲間志略に曰く、陸深が眞草行書、鐵畫銀鉤の如し、遒勁法あり、北海に韻頑し子昂と伯仲す、一代の名筆なり。

○董其昌(明) 董其昌字は玄宰、華亭の人なり。萬曆十六年の進士、庶吉士に選ばれ編修を授けらる。出て湖廣提學副使と爲り、太常少卿に起さる。天啓二年兼侍讀學士に改め禮部尙書に歴遷し、太子太傅を贈り文敏と謚す。天才俊逸善く名理を談す。少にして書畫を好み、眞蹟を臨摹して寢食を忘るるに至る。中年微際に悟入し遂に自ら名家たり。行楷の妙一代に跨絶し、四方金石の刻、造り請うて虚日無し。尺素短札人間に流布し、争ひ購うて之を寶とす。

其昌云ふ、吾書を學ぶ十七歳の時に在り、初め顔平原の多寶塔を師とし、又改めて虞永興を學び、以爲らく唐書は晉魏に如かずと、遂に黃庭經及鍾元常の宣示表力命表、還示帖、丙舍帖に倣ふ凡そ三年、自ら謂ふ古に逼ると、復た文徵仲、祝希喆を以て之を眼角に置かず。乃ち書家の神理に於て實は未だ入處あらず、徒らに格轍を守るのみ。嘉興に遊ぶに比び盡く項子京が家藏の眞蹟を觀るを得、又右軍の官奴帖を金陵に見、方さに從

前妄りに自ら標評したるを悟る。此より漸く小く得るところあり、今將に二十七年ならんとす、猶ほ隨波逐浪の書家と作る。翰墨の小道其の難き是の如しと。

其昌又云く、余が書趙文敏子昂と較す、各短長あり、行間茂密、千字一同なること吾趙に如かず。若し歷代を臨做せば趙は其の十に一を得、吾其十に七を得ん。又趙が書は熟に因て俗態を得、吾書は生に因て秀色を得たり。吾書往々率意なり、吾作意するに當ては趙が書亦一籌を輸せん、たゞ作意する者少なきのみと。

謝肇淛云く、今書名の世に振ふ者南には則ち董太史玄宰、北には則ち邢太僕子愿あり。其合作の筆往往前に古人無らん。

董玄宰毫を楮素に揮ふ簇簇として行蠶の如く、閃閃として迅雷飛電の如し。

○米萬鍾(明) 米萬鍾字は仲詔、その先は關中の人、京師に徙る。萬曆二十三年の進士、仕へて太僕少卿に至る。性石を好む、人いふ南宮(米芾)の顛無くしてその癖はありと。號して友石先生とす。行草は米芾の家法を得て董其昌と名を齊しうす。時に南董北米の譽あり。尤も署書を善くし名を擅にすること四十年、書蹟天下に遍ねし。その著篆隸考譌二卷あり。

○趙嘏(明) 趙嘏字は子函、一字は屏國、萬曆三十七年鄉薦を領す。居るところ。周

秦漢唐の故都に近く、古金石名書多く在り。援据考證して、略ほ歐陽修(集古錄) 趙明誠

(金石錄の) 洪丞相(名は适隸釋隸續)の三家に彷彿ひ、名づけて石墨鐫華といふ。自らいふ。

三十年の力を窮めたり、多くは都玄敬楊用修の未だ見ざる所なりと。

鐫華の自序に曰く、余八歳の時朱秉器先生虞世南の書を手にし予をして臨摹せしめたり。余心私かに古人を慕ひ、一名碑を獲る毎に必ず摩弄日を累ね去るに忍びず、片石隻字も輒ち之を疏記せりと。

○趙宦光(明) 趙宦光字は凡夫、太倉の人、居を寒山に卜す。著書數十種尤も字學に精し、説文長箋はその獨り解するところなり。

宦光は倉史の學に意篤く草篆を創作す。蓋し天璽碑に基いて少しく變ぜしなり。その人品已に超るにより書も亦遺蹟を躡まず。

○成親王(清) 清の乾隆帝の第十一子、嘉慶帝の兄、諱は永瑤、謚して哲といふ。幼より書法に精しく深く古人用筆の意を得たり。嘉慶九年帝特に命じてその帖序を刻し海内に行はしむ。

○郭宗昌(清) 字は允伯、陝西華州の人、清朝のはじめ隠居して仕へず。書畫金石篆刻分法を鑒別すること當時第一とす。金石史の著あり。砥齋題跋に曰く、漢隸の失はるゝや久し、衡山尙ほ辨せず、餘子は知るべきのみ、蓋しこれを辨ずるは允伯先生より始まると。

○傅山(清) 字は青主、又の字青竹、公之它と號し朱衣道人といふ。太原陽曲の人。康熙十七年博學の故を以て薦めらる。病を以て固辭す。詔して中書銜を加ふ、遂に郷里に歸老す。結埼亭集に曰く、先生書に工みに大小篆隸より以下精ならざるなし、兼て畫に工みなり。嘗て自らその書を論じて曰く、弱冠にして晉唐人の楷法を學ぶ、皆效ふ能はず。松雪香山の墨迹を得るに及び、これを臨して則ち遂に眞を亂るに至れり。已にして自ら愧ぢて惟へらく、これ君子を學ばんとして近づき難く、小人と遊んで忽ち親しむに同じ。松雪曷んぞ嘗て右軍を學ばざらん。而かも結果淺俗なり。心術壞れて手もこれ

に隨へばなりと、茲に於て復た顏太師を學べりと。

○王鐸(清) 字は覺斯、嵩樵と號す、河南孟津の人、明の天啓二年の進士、清に仕へて禮部尙書たり、文安と謚す。書は魏晉を宗とし名當代に重し。董其昌と並び稱せらる。擬山園帖ありて世に行はる。

○王時敏(清) 字は遜之、煙客と號す、江南太倉州の人、錫爵の孫たるを以て太常に至る。又西廬老人と號せり。隸書は秦漢を追ひ、榜書八分は近代第一とす。

○宋曹(清) 字は射陵、江蘇鹽城の人。書法約言の著あり。

○紀映鍾(清) 字は伯紫、號は愨叟、江南上元の人、自ら鍾山逸老と稱す、詩に工みに書を善くす。

○馮班(清) 字は定遠、鈍吟と號す、江蘇常熟の人、鈍吟書要、鈍吟雜錄の著ありて書を論す。

○查士標(清) 字は二瞻、梅壑散人と號す、江南海陽の人、揚州に流寓す、明の諸生たり、華亭と同干支なり、後乙卯生と號す。その書法精妙、人稱して米董の再出と謂へり。

○鄭篋(清) 字は汝器、谷口と號す、江蘇上元の人。生平力めて天下の漢碑を求め、餘力を遺さず、その家藏の古碑積んで四厨あり。その八分書、漢人を學んで間々草法を參す、一時の名手たり。

○程邃(清) 字は穆倩、垢道人と號す、江南新安の人。書畫篆刻を善くし醫に精し。歷代碑本及び秦漢の印章名畫法書を藏する事甚だ富めり。分隸の學は漢を以て宗とせり。常に酒を愛し酣にして起つて舞ひ、更に爆竹を鳴らし以てその氣を作り、袖を攘ひ筆を濡し、客と談笑の間に積むところの大小幅を書き盡せり。

○王餘佑(清) 字は介祺、五公山人と號す、直隸新城の人。書法遺逸にして感慨激烈の趣は一に詩より發せり。

○萬壽祺(清) 字は年少、江蘇徐州の人、明の崇禎三年の舉人、明滅びてより沙門慧壽と號せり。書は晋人に循ひ兼ねて篆刻に工みなり。

○吳山濤(清) 字は岱觀、塞翁と號す、安徽歙縣の人、崇禎の舉人、官は知縣たり。その書法飄逸、よく自ら一家をなす。

○馮行賢(清) 字は補之、江蘇常熟の人、鈍の長子たり。大瓢偶筆に曰く、清秀俗氣

なし、但筆法を知らず、一に分間布白を以て主とすと。

○楊思聖(清) 字は猶龍、雪樵と號す、直隸鉅鹿の人、順治三年の進士、四川布政使たり。世祖心を翰墨に留め、詞臣の書を能くする者を召し、面のあたり筆札を給す、思聖と陳宮詹爨との書するところの幅、獨り旨に稱ひ、賞を賜ふ。

○沈荃(清) 字は貞蕤、釋堂又は充齋と號す、江蘇華亭の人、順治九年の探花(殿試及第三)にして禮部侍郎となり、文格と諡す。康熙帝嘗て内殿に召して古今の書法を論す。凡そ御製の碑版、殿廷の屏幃は荃に命じて之を書せしむ。常に帝に侍し帝の書を作るを見て即ちその弊を指しその理を解く、上深くその忠益を嘉す。後荃が子宗敬、編修を以て入つて直す、上命して書を作らしむ、曰く、朕が初めて書を學ぶや宗敬が父の荃屢得失を指せり、今に至るも書を作る毎に彼が勤めたるを思はざることなしと。

○宣重光(清) 字は在辛、江上外史、鬱岡掃葉道人と稱す、江蘇丹徒の人、順治九年の進士、御史たり。書畫に工みにして風骨稜々權貴といへども之を憚れり。姜西溟、汪退谷、何義問と四大家と稱せらる。

○勵杜訥(清) 字は近公、直隸靜海の人、特に編修を授けられ刑部侍郎となる、文格

と謚す。槐西雜志に曰く、勅紙を剪つて方一寸のもの百片を作りその上に一字を書す。その片々を累ね見るに一として絲毫の出入なかりきと。

○王鴻緒(清) 字は秀友、儼齋、橫雲山人と號す、江蘇華亭の人、廣心が子、康熙三十二年の探花、戸部尙書たり。書を作るに繩を開枋に繋ぎ右肘を架して書けりといふ。

○倪燦(清) 字は闇公、鴈園と號す。江蘇上元の人、康熙十六年の舉人、博學鴻辭の第二人に擧げらる。官は檢討たり。倪氏雜記あり、その書法詩格一時に妙絶たり。

○朱彝尊(清) 字は錫鬯、竹垞、鷗舫と號し、後に小長蘆釣魚師と稱す。浙江秀水の人、布衣を以て博學鴻詞に擧げられ檢討を授けらる。八分書を善くし金石考證に深し。清の初め鄭谷口はじめて漢碑を學び、朱等によりて漢隸の學復た興る。

○王宏撰(清) 字は無異、山史と號す。陝西華陰の人、博學鴻詞に薦められて就かず。書に工みに文を能くし、金石の學に精しく、善く法書名畫を鑒別す。

○陳奕禧(清) 字は六謙、又の字子文、香泉と號す、浙江海寧の人、官は雲南南安の知府たり、隱綠軒題跋の著あり、刻に子壽堂帖、夢墨樓帖あり。

○姜宸英(清) 字は西溟、湛園と號す。浙江慈溪の人、康熙三十六年の探花、官は編

修、科場の事を以て官を罷め、獄中に卒す。古文に工みに小楷尤も工なり。聖祖嘗て朱彝尊、嚴繩孫とを並せ目して三布衣といへり。

○汪士鋐(清) 字は文升、退谷と號す、江蘇吳縣の人、康熙三十六年の狀元、官は中允たり、書法國朝第一と稱せらる。

○何焯(清) 字は岬瞻、義門と號す、江蘇長州の人、康熙四十一年特に舉人を賜ひ、翌年特に進士を賜ふ。官は編修たり。晉唐の法帖を學び眞行書ならびに能品に入る。

○徐用錫(清) 字は壇長、晝堂と號す、江南甯遷の人、康熙四十八年の進士、官は侍講、字學劄記の著あり。

○張照(清) 字は得天、天瓶居士と號す、江蘇華亭の人、康熙四十八年の進士、官は刑部尙書、文敏と謚す。刻に天瓶齋帖あり。御製懷舊詩に、書に米の雄あり、而かも米の略なし、また董の整あり、しかも董の弱なし、羲之が後の一人、照を舍いて誰か能く若かん云々とあり。

○王樹(清) 字は若霖或は翁林、號は虛舟或は竹雲、江南金壇の人、康熙五十一年の進士、官は吏部員外郎。竹雲題跋、虛舟題跋の著あり。尙他に淳化閣帖考正十二卷、二

十種蘭亭、十二種千文、積書巖帖六十冊の著あり、書に工みに古碑刻鑒定に最も精し。
○蔣衡(清) 字は拙存、湘颺と號し、晩年江南拙老人、函潭老布衣と號す、江南金壇の人、貢生なり、小楷一時に冠絶す、游藝祕録の著あり。

○鄭燮(清) 字は克柔、板橋と號す、江南興化の人、乾隆元年の進士、山東の知縣たり。廣陵詩事に曰く、少にして楷法を爲る極めて工なり、自ら謂へらく世人は奇を好むと、因て正書を以て篆隸を雜へ、又間々畫法を以てす、故に波磔の中往々にして石文蘭葉ありと。墨林今話に曰く、書は隸楷參半す、自ら六分半書と稱す、瘦硬の致を極むと。書と共に詩と畫に工みに風流雅諳古秀獨絶と稱せらる。

○丁敬(清) 字は敬身、鈍丁と號し、自ら龍泓山人と稱す。浙江錢塘の人、市塵に隠れ米を賣つて自ら給す。金石の文を好み、自ら絶壁を窮め荆榛を披き苔蘚を剝ぎ、手づから摹搨して以て傳ふ、武林金石錄の著あり。分隸皆古に入り篆に於て尤も篤し。

○金農(清) 字は壽門、又の字冬心、又司農、稽留山民と號す、浙江錢塘の人。中年にして齊魯燕趙秦晉楚奧に放浪し、遇ふところ無くして歸れり。晩年揚州に寓し畫を賣りて自ら給す。書は楷隸に出入し、國山及び天發神識兩碑に本づく、梅を畫くに尤も

工なり。

○蔣驥(清) 字は赤霄、江南金壇の人、湘颺が子、讀書法論の著あり。

○裘曰修(清) 字は叔度、一字は漫士、諾皋と號す。江西新建の人、乾隆四年の進士、工部尙書に進み文達と諡す。書法自ら一家を成す。帝嘗てその張榜寮に似たるを評す、嘗て張が書ける華嚴經を得たり、數冊を缺く、令して之を足さしむ。

○梁國治(清) 字は階平、瑤峰と號す。浙江會稽の人、乾隆十三年の狀元、大學士たり、文定と諡す。洪亮吉北江詩話に曰く、梁文定彭文勤の楷法は昔人の云はゆる堆墨書なりと。

○劉墉(清) 字は崇如、石菴と號す、山東諸縣の人、乾隆十六年の進士、體仁閣大學士、文清と諡す、刻に清愛堂帖あり。包世臣の藝舟双楫に曰く、少にして香光を習ひ、壯にして坡老に遷り、七十以後心を北朝碑版に潛む、精力已に衰へ深く造る能はずといへども、然も學識を興すを意とし塵外に超然たりと。松軒隨筆に曰く、陳星齋先生嘗て本朝の書法を論じ、首として何義門を推し、次は則ち姜西溟、趙大鯨とす、偏嗜に屬するに似たり、愚見を以て之を言はゞ、當に王文安、劉文清を以て最とすべし、次は則ち

張文敏、陳香泉、汪退谷なり、然も張陳汪は皆王劉の厚きに及ばず。王は猶ほ古人に依傍す、劉は即ち厚うして能く脱す、古人に入りて古人に出でたり云々と。

○翁方綱(清) 字は正三、覃谿と號す。晩に蘇齋と號す、乾隆十七年の進士、内閣學士、書は永興を學び考證金石に長す。

○梁同書(清) 字は元穎、山舟と號し後に不翁、九十以後は新吾長翁と號す。詩正の子、乾隆十七年特に進士を賜ひ侍講たり。書は初め顏柳を法とし、中年米が法を用ひ、七十後愈變化に臻り自然に純任す、日本の王子書を好みその書の評定を求む。九十一歳にして無錫の孫氏の爲に家廟の額に忠孝傳家の四大字を作る、字の大きさ方三尺、魄力沈厚觀る者歎絶せざるなし。老年又能く蠅頭楷書を作る、精力の人に過る者あるなり。

○錢大昕(清) 字は及之、又は曉徵、號は辛楣、又竹汀。江蘇嘉定の人、乾隆十九年の進士、少詹事たり。平生の著述等身、金石に博く尤も漢隸に精し。

○王文治(清) 字は禹卿、夢樓と號す。江蘇丹徒の人、乾隆二十五年の探花、雲南臨安の知府たり。兩般秋雨菴隨筆に曰く、國朝の書家、劉石菴相國(文清)専ら魄力を講じ、王夢樓太守専ら風神を取る。濃墨宰相淡墨探花の目ありと。

○梁獻(清) 字は聞山、松齊と號す、安徽亳州の人、乾隆二十七年の舉人、四川の知縣たり。論書筆記の著あり。書に工みにして錢塘の梁學士、會稽の梁文定と三梁の目あり。

○姚鼐(清) 字は姬傳、安徽桐城の人、乾隆二十八年の進士、禮部郎中たり。晩にして書に工みなり。専ら大令に精しく方寸の行草を作る。宕逸にして空怯せず、時に華亭の外に出づ、その半寸以内の眞書は潔淨にして而かも能く恣肆なり。多くは自得する所たり。

○孔繼涑(清) 字は信夫、谷園と號す。衍聖公の子(孔子の嫡流)乾隆三十三年の舉人、候補中書たり。古人の墨跡碑板を嗜み鑒別精密、刻するところ玉虹樓帖十六卷、鑒眞帖二十四卷、摹古帖二十卷、國朝名人法書十二卷、張文敏瀛海仙班帖二十卷あり。

○程瑤田(清) 字は易田、易疇と號す、安徽歙縣の人、乾隆三十五年の舉人、嘉定の教諭たり。攻據の學に精しく尤も鐵筆に精し、書法は晉唐に步武するもその學問の掩ふところとなれり。その著通藝錄の筆勢の一條、講じ得て最も精し、前人未だ曾て道破せざるところなり。

○鐵保(清) 字は冶亭、梅菴と號す、滿洲正黃旗人、董鄂氏なり、乾隆三十七年の進士、兩江總督たり。湖海詩傳に曰く、冶亭尤も書法に工みなり、北人論するもの、劉石菴、翁覃溪と共に鼎足となす。

○錢坫(清) 字は獻之、十蘭と號す。竹汀(大昕)の族子なり。乾隆三十九年の舉人、州判たり。小篆に工みにして李陽冰徐鉉の下に在らず、晚年右體偏枯して左手にて篆を作る、尤も精絶、その自負また凡ならず、嘗て一石章に刻して曰く、斯氷の後直ちに小生に至ると。

○鄧石如(清) 字は頑伯、完白山民と號す、本名は瑛、仁廟の諱を避けて字を以て行はる、安徽懷甯の人なり。藝舟双楫に曰く、山人篆分を移して今隸を作る、草書は縱逸といへども晉人に入らず、筆致蘊籍、五季以來の俗氣無しと。息柯雜著に曰く、完白が眞書は六朝人より深し、蓋し篆隸用筆の法を以て之を行る、姿媚の中別に古澤多し、因に近今の所有にあらずと。

○錢伯坻(清) 字は魯斯、號は漁陂、僕射山樵、江蘇陽湖の人。正行書を以て名はる。劉文清隱退後、論者推して第一とす。

○阮元(清) 字は伯元、芸臺と號す、晚年怡性老人と號す。江蘇儀徵の人、乾隆五十四年の進士、體仁閣大學士に至る。文達と諡す。

○伊秉綬(清) 字は組似、墨卿と號す。福建寧化の人、乾隆五十四年の進士、惠州に守として再び揚州に守たり。詩に工みに尤も隸法を善くし古書畫を蓄ふ。起居言笑藹然、君子の儒なり、隸書を作る、漢魏人の舊跡の如し。

○洪亮吉(清) 字は稗存、江蘇陽湖の人、乾隆五十五年の榜眼(殿試及第の第二人目)、編修たり、晩年更生居士と號す。詩文を以て名を擅にし經史注疏說文地理に通じ篆書に工みなり。

○桂馥(清) 字は未谷、雋門と號す、別號肅然山外史、山東曲阜の人、乾隆五十五年の進士、知縣たり。學博くして精しく、尤も說文小學に深し、詩才隸筆同時に偶無し。松軒隨筆に曰く、百餘年來、天下の八分書を論すれば桂未谷を推して第一とすと。退菴隨筆に曰く、伊墨卿の隸書は愈大にして愈妙、未谷は愈小にして愈妙なりと。

○陳希祖(清) 字稗孫、玉方と號す。江西新城の人、乾隆五十八年の進士、官は御史たり、書に工みに董文敏晩年の神髓を得たり。識者はいふ、本朝の書家張文敏劉文清と鼎足たるべきもの唯この人のみと。

○江聲(清) 字は叔遷、良庭と號す、江蘇仁和の人、嘉慶元年の孝廉方正なり。平生行楷を作らず、往來の筆札皆古篆を作り、俗字を用ふるを肯ぜず。嘗て曰く、許氏説文は千古第一部書たり、九千三百五十三字を除いて外に字無く、説文を除いて外に學問無しと。

○張廷濟(清) 字は叔未、浙江海鹽縣の人、嘉慶の解元なり。

○吳榮光(清) 字は伯榮、又の字は殿垣、荷屋と號す、廣東南海の人、嘉慶四年の進士湖南巡撫たり。帖鏡六卷を著す。帖目次序を列ね、某刻の何の字は殘泐、何の處は斷裂と詳示して一目了然らしむ。帖買ために偽を容るる所なし、故に鏡といふ。

○陳鴻儒(清) 字は子恭、曼生と號す。浙江錢塘の人、嘉慶六年の拔貢、江蘇の同知たり。詩文書畫皆姿を以て勝る、篆刻秦漢を追ひ、浙中の人悉く之を宗とす。八分書尤も簡古超逸、恒踪を脱盡す。

○包世臣(清) 字は慎伯、後に倦翁と號す、安徽涇縣の人、嘉慶十二年の舉人、知縣かり。中年の書は顔歐に従つて入手、轉じて蘇董に及び、後力を北魏に肆にす、晚年二王を習ひ、遂に絶業を成せり。藝舟双楫の著あり。

○郭尙先(清) 字は蘭石、福建莆田の人、嘉慶十四年の進士、大理寺卿たり。八法に工みなるを以て名あり。

○程恩澤(清) 字は雲芬、春海と號す。安徽歙縣の人、嘉慶十六年の進士、戸部右侍郎たり、學識流俗に超え、六藝九流皆好學深思その意を知る。もと篆法に工みにして益熟す、説文の學に精し。

○張琦(清) 字は宛鄰、翰風と號す、江蘇陽湖の人、嘉慶十八年の舉人、山東の知縣たり。書を嗜み漢の分法を移して眞行に入れ、又北朝の眞書を以て分勢を歛む、並びに騰蹕、その蘊籍當世無此と稱せらる。

○何紹基(清) 字は子貞、暖叟と號す。湖南道州の人、道光十六年の進士、編修たり。書に工みに帖として摹せざるなし、尤も爭坐位帖を臨するを喜ぶ。

○曾國藩(清) 字は滌生、湖南湘鄉の人、道光十八年の進士、大學士兩江總督に至る、文正と諡す。

○吳熙載(清) 初の名は廷鸞、字を以て行はるるを以て更に讓之を字とす。江蘇儀徵の人なり。東南書法の大宗と目せらる、各體の書を善くし鐵筆に工みなり。

○俞樾(清) 字は蔭甫、曲園居士と號す、浙江德清の人、道光二十七年の進士、編修たり、俞氏叢書の著あり。

書

譜



孫過庭書譜

夫自古善書者。漢魏有鍾張之絕。晉末稱二王之妙。王羲之云。頃尋諸名書。鍾張信為絕倫。其餘不足觀。可謂鍾張云歿。而羲獻繼之。又云吾書比之鍾張。鍾張抗行。或謂過之。張草猶當鴈行。然張精熟。池水盡墨。伯英臨池學書。池水盡墨。凡家之衣帛。必書而後練之。假令寡人耽之若此。未必謝之。此乃推張邁鍾之意也。考其專善。雖未果於前規。撫以兼通。故無慙於卽事。譯者謂彼之四賢。古今特絕。孫虔禮係唐武后時人。乃欲排歐虞。直接魏晉。故譜唯推四人。為淵源之所。自而今不逮古。古質而今妍。夫質以代興。妍以俗易。俗書妍媚。而意味愈淺。黃庭堅曰。如瘞鶴銘。中興頌帖。雖難為俗學者言。要歸畢竟如此。如人炫時。五色無主。及神澄意定。青黃皁白。亦自粲然。俗書妍媚。覆看便不佳矣。雖書契之作。適以記言。而淳醜一遷。質文三變。馳騫沿革。物理常然。貴能古不乖時。今不同弊。所謂文質彬彬。然後君子。何必易雕宮於穴處。反玉輅於椎輪者乎。學古緒言曰。肉豐而骨勁。墨濃而意淡。巧藏於拙。秀出於偉。斯無勿

善。又云子敬之不及逸少，猶逸少之不及鍾張意者，以為評得其綱紀而未詳其始卒也。評者謂元常古肥。子敬今瘦。芝為隸草。義為行草。亦文質遞降之意也。且元常專工於隸書。李贇曰。過庭所指即今路是也。伯英尤精於草體。彼之一美。而逸少兼之。擬真則餘草。比草則長真。雖專工小劣。而博涉多優。總其始終。匪無乖互。黃長谷曰。漢隸用筆。圓勁雅淡。其體區而勿。楷觀之法。因而變之。以成今草。書之體勢。一筆而成。氣脈通聯。隔行不斷。謂一筆書。右軍云。我真書過鍾。而草不兼張。乃兼鍾張之所長。故謂較長不足比。短有餘也。謝安素善尺牘。而輕子敬之書。子故嘗作佳書與之。謂必存錄。安輒題後。荅之甚以為恨。安嘗問敬。卿書何如右軍。荅云。故當勝。安云。物論殊不爾。子敬又荅。時人那得知敬。雖權以此辭。折安所鑒。自稱勝父。不亦過乎。且立身揚名。事資尊顯。勝母之里。曾參不入。以子敬之豪翰。紹右軍之筆札。雖復龜傳楷則。實恐未克箕裘。況乃假託神仙。恥崇家範。以斯成學。孰愈面牆。飛鳥帖。臣獻之頓首。今月十二日辰時。中使宣陛下容旨。俯詢字學之由。臣仰承帝命。密露天機。味死有言。狂率待罪。臣年二十四。隱林下。有飛鳥。左手持紙。右手持筆。惠臣五百七十九字。臣未經一周。形勢粲然。其書文章不續。難以究識。後載周以兵寇充斥。道路脩阻。乞食揚州市上。一老母姓沈。字光美。惠臣一餐。無以答其意。臣遂獲千金。於匙而上。作一夜字。令便市。債觀者三。遠觀者二。未經數日。遂獲千金。後羲之往都。臨行

題壁。子敬密拭除之。輒書易其處。私為不惡。羲之還見。乃歎曰。吾去時真大醉也。敬乃內慙。是知逸少之比鍾張。則專博斯別。子敬之不及逸少。無惑疑焉。

墨林快事曰。大令書無右軍八面變化。其辭筆意多複。間架下茂實。所以貴於人世者。筆畫勁利。致蕭疎。無一點塵土氣。無一分桎梏束縛。難以勉強傲也。又米芾畫禪師筆曰。右軍書十。不敵大令書一。蓋右軍內涵。大令外拓。襄陽深得外拓之法。從此以北海傑異之氣。故推舉大令。而贊右軍。容臺集曰。元章晚年自謂無右軍一點俗氣。要其超向如此。

余志學之年。留心翰墨。味鍾張之餘烈。挹羲獻之前規。極慮專精。時逾二紀。有乖入木之術。無間臨池之志。觀夫懸針垂露之異。奔雷墜石之奇。鴻飛獸駭之姿。鸞舞蛇驚之態。絕岸頽峯之勢。臨危據橋之形。或重若奔雲。或輕如蟬翼。導之則泉注。頓之則山安。纖纖乎似初月之出天涯。落落乎猶衆星之列河漢。同自然之妙。有非力運之能成。蔡邕曰。為書之體。須入其形。鍾繇曰。每見衆類。皆畫象之。羲之曰。其言一乎。王弼州曰。細玩一字萬同。美璧瑕也。信可謂智巧兼優。心手雙暢。翰不虛動。下必有由。一畫之間。變起伏於鋒杪。一點之內。殊衄挫於毫芒。字形之妙。全在二用筆。況云積其點畫。乃成其字。曾不旁窺尺牘。俯習寸陰。引班超以為辭。援項籍而自滿。東觀漢記曰。班超家貧。傭書。數日。丈夫富。

如傳介子張騫。立功異域。以取封侯。安能久事筆硯。史記項藉少時學書不成。去學劍。又不
 成。項梁怒之。數曰。書足以記名姓而已。劍一人敵。不足學。學萬人敵。於是項梁乃教籍兵法。
 籍大喜。任筆為體。聚墨成形。心昏擬效之方。手迷揮運之理。求其妍妙。不亦謬哉。
 用筆之妙。全在心摹手追。楊子曰。斷木為棊。梲革為鞠。亦有法焉。而況書乎。

然君子立身。務修其本。揚雄謂詩賦小道。壯夫所不為。況復溺思豪釐。淪精翰
 墨者也。夫潛神對奕。猶標坐隱之名。樂志垂綸。尚體行藏之趣。世說。王中郎以圍棋為坐隱。詎
 若功定禮樂。妙擬神仙。說文序曰。周衰諸侯力政。不統于王。惡禮樂之害已。而皆去其藉。書評。蔡邕書。骨氣洞達。爽爽如神。力張伯英書。如武帝受道。憑虛欲。猶埏埴之罔窮。與工鑪而並運。好異尚奇之士。翫體勢之多方。窮微測妙
 之夫。得推移之奧蹟。著述者。假其糟粕。藻鑿者。挹其菁華。固義理之會歸。信賢達
 之兼善者矣。存精遇賞。豈徒然與。是以東晉士人。互相陶淬。至於王謝之族。郗庾
 之倫。據王僧文字志。魏宋六十人中。載王導。王蒙。王廙。王僧。王裕。王羲之。王怡。王獻之。王珣。謝安。郗愔。庾翼。庾翼。等人。若書斷。書賦。及法書要錄所載各不同。縱不盡其神
 奇。咸亦挹其風味。去之滋永。斯道逾微。方復聞疑稱疑。得末行末。古今阻絕。無
 所質問。設有所會。誠祕已深。遂令學者茫然。莫知領要。徒見成功之美。不悟

所致之由。

或乃就分布於累年。向規矩而猶遠。圖真不悟。習草將迷。

梁庾元威曰。學阮成書者。不得其骨力婉媚。唯

學。擊拳委盡。學。薄紹之書。者不。得其批。研。潤。微。徒自經營。噴急。晚途別法。食省愛異。濃頭纖尾。斷腰頓足。一八相似。十小難分。屈。等如。句。變。前。為。草。咸言祖。迷。王。蕭。無。妨。詭。謬。星。不。從。生。不。從。來。許。慎。門。徒。居。然。嗚。嗚。衛。恒。子。弟。寧。不。傷。嗟。蓋。五。代。文。衰。如。此。假令薄能草書。龜傳隸法。則好溺偏固。自闕通規。

如。趙。壹。非。之。沮。張。顏。之。推。之。斥。詎。知。心。手。會。歸。若。同。源。而。異。派。轉。用。之。術。猶。共。樹。而。分。條。者。乎。黃。庭。堅。曰。張。長。史。折。釵。股。顏。太。史。屋。漏。法。右。軍。畫。地。印。印。泥。懷。素。飛。鳥。驚。蛇。入。草。索。靖。銀。鉤。蠶。尾。同。是。一。法。心。不。知。手。手。不。知。心。法。耳。加以趨變適

時。行書為要。題勒方富。真乃居先。草不兼真。殆於專謹。真不通草。殊非翰札。

東坡集云。物理一也。通其意。則無適而不可。分科而醫。醫之衰也。占色而畫。畫之陋也。和緩之醫。不別老少。曹吳之畫。不擇人物。謂彼長色。是則可能。是不。能。是。則不可。世之篆書不兼隸。真書不及草。未通其意者也。王弼州曰。蔡君謨云。篆隸真書與行草。俱是一法。文衡山曰。真書血脈貫通。放之便是行草。行草動必有法。整之便是正楷。能書者要是一以貫之。

真以點畫為形質。使轉為性情。草以點畫為性情。使轉為形質。草乘使轉。不能成字。真虧點畫。猶可記文。廻互雖殊。大體相涉。性情者。抑揚頓挫。因以取態是也。形質。謂長短大小高下出入多之間。故亦旁通二篆。俯貫八分。包括篇章。涵泳飛白。若毫釐不察。則吳趣殊風者焉。

鼎考曰甘鼎者。本無所銘識。刻其蓋曰甘。以書考之於古。在篆為箕。在籀為期。在古為其。未少異也。今人作草動依楷則。然鹿頭戴草。夜前垂乍。皆不從楷而從篆。又不可不明也。

至如鍾繇隸奇。張芝草聖。此乃專精一體。以致絕倫。伯英不真。而點畫狼藉。元常不草。而使轉縱橫。自茲以降。不能兼善者。有所不逮。非專精也。鍾以真掩其草。張以精。非不逮也。

雖篆隸章草。工用多端。濟成厥美。各有攸宜。篆尚婉而通。隸欲精而密。草貴流而暢。章務險而便。然後凜之以風神。溫之以妍溫。鼓之以枯勁。和之以閑雅。故可達其性情。形其哀樂。驗燥濕之殊。節千古之依。張懷瓘曰。形見曰象。象者法象也。心不能沙。操於物。墨不能曲。盡於心。慮以圖之。勢以生之。氣以和之。神以肅之。合而裁成。隨變所適。然體老莊之一息異時。百齡俄頃。嗟乎不入其門。詎窺其奧者也。 小知不及大知。小年不及大年。淺識之夫。難與論書矣。 又一時而書有乖有合。合則流媚。乖則彫疎。略言其由。各有其五。神怡務閑。一合也。蔡邕曰。書欲先散懷抱。任情恣意。然後書之。若迫於事。雖中山兔毫。不精也。 感惠徇知。二合也。如山谷為王補之少子。書陰長生詩。蔡君謨書集古錄序。皆妙筆也。 時和氣潤。三合也。董思白曰。對景舒情。為紙墨相發。四合也。 周密曰。王右軍少年。多用紫紙。中年用麻紙。取其流麗。便於行筆。蔡中則非流純豐素。不妄下筆。章誕曰。用張芝。

筆。左伯紙。任及墨。兼此三具。又得巨手。然後可。以建方丈之字。方寸千言。山谷云。子瞻一日在學士院。閑坐。忽命左右取紙筆。寫平曠交遠風。良苗亦懷新雨句。大書。小楷。行草書凡八紙。擲筆太息曰。好好。散其紙於左右。給事。 偶然欲書。五合也。山谷云。子瞻一日在學士院。閑坐。忽命左右取紙筆。寫平曠交遠風。良

心遽體留。一乖也。意違勢屈。二乖也。風燥日炎。三乖也。紙墨不稱。四乖也。情忘手闕。五乖也。乖合之際。優劣互差。得時不如得器。得器不如得志。陳繹曾曰。明潔淨水仙隱。氣自然肅。珍怪豪傑。氣自然奇。佳麗園池。氣自然麗。造化上古。氣自然古。幽貞閑適。氣自然淡。故書不獨稽其點畫也。亦想見高山流水之志焉。 若五乖同萃。思遏手蒙。五合交臻。神融筆暢。暢無不適。義無不從。當仁者。得意忘言。罕陳其要。企學者。希風叙妙。雖述猶踈。徒立其工。未敷厥旨。不揆庸昧。輒效所明。庶欲弘既往之風規。導將來之器識。除繁去濫。覩述明心者焉。書斷。過庭博雅。有文章。草書憲章二王。工於用筆。偽拔剛斷。尚異好。奇。然少功用。而有天真。

代有筆陣圖七行。中畫執筆圖。手貌乖舛。點畫湮訛。頃見南北流傳。疑是右軍所製。雖則未詳真偽。尚可發啓童蒙。既常俗所存。不籍編錄。一至於諸家勢評。多涉浮華。莫不外狀其形。內迷其理。今之所撰。亦無取焉。略 若乃師宜官之高

名。徒彰史牒。衛恒四體書曰漢師宜官。能楷法。大則一字徑丈。小則方寸千言。其於其能。或時不持錢詣酒家飲。因書其壁。顧觀以酬酒錢。直計錢足而滅之。每書輒削而焚其附。梁鵠乃益爲樹而飲之酒。候其醉。而竊其附。鵠卒以書至選部尙書。名最著。邯鄲淳之令範。空著縑緗。書斷魏邯鄲淳。八體悉工。師于曹喜。尤精古文。大篆。八分。隸書。自杜林衛密。以來。古文泯絕。由淳復著。暨乎崔杜以來。蕭羊以往。漢崔瑗。善章草。師於杜度。點畫之勢。爲三卷。杜座草書。重於章帝。詔使草書上。事。時稱草聖。蕭思話學於羊欣。得其體法。行草筆勢不斷。上方琳之。不足。下方范曄。有餘。羊欣學於獻之。年十二時嘗著新絹裙。畫痕。獻之書。稍數幅而去。書學自此益進。撰續筆陣圖。及古今能書人名二卷。時云買王得羊。不失所望。代祀綿遠名氏滋繁。或藉甚不渝。人亡業顯。或憑附增價。身謝道衰。加以糜蠹不傳。搜祕將盡。偶逢真賞。時亦罕窺。優劣紛紜。殆難翫縷。略三其有顯聞當代。遺跡見存。無俟抑揚。自標先後。略四且六爻之作。肇自軒轅。八體之興。始於嬴政。其來尙矣。厥用斯弘。但古今不同。妍質懸隔。既非所習。又亦略諸。略五復有龍蛇雲露之流。龜鶴花英之類。俱述述乍圖真於率爾。或寫瑞於當年。巧涉丹青。工虧翰墨。異夫楷式。非所詳焉。略六

代傳義之與子敬筆勢論十章。文鄙理疎。意乖言拙。詳其旨趣。殊非右軍。且右軍位重才高。調清詞雅。聲塵未泯。翰牘仍存。觀夫致一書。陳一事。造次之際。稽古

斯在。豈有貽謀令嗣。道叶義方。章則頓虧。一至於此。又云與張伯英同學。斯乃更彰虛誕。若指漢末伯英。時代全不相接。必有晉人同號。史傳何其寂寥。非訓非經。宜從集擇。略七

夫心之所達。不易盡於名言言之所通。尙難形於紙筆。龜可髣髴其狀。網紀其辭。冀酌希夷。取會佳境。闕而未逮。請俟將來。今撰執使轉用之由。以祛未悟。執謂深淺長短之類是也。謂執筆之淺深長短也使謂縱橫牽掣之類是也。上下爲縱。左右爲橫。牽左爲牽。掣

右爲掣。轉謂鈎環盤紆之類是也。屈爲鈎。勢爲環。用謂點畫向背之類是也。四條皆

書斷曰。過庭著運筆論。亦得書之旨趣也。方復會其數法。歸于一途。編列衆工。錯綜群妙。舉前賢之未及。啓後學於成規。窮其根源。析其枝派。貴使文約理贍。迹顯心通。披卷可明。下筆無滯。詭辭異說。非所詳焉。姑蘇志。宋高廟垂情藝文。嘗謂此譜妙。然今之所陳。務俾學者。但右軍之書。代多稱習。良可據爲宗匠。取立指歸。豈惟會古通今。亦乃情深調合。致使摹揚日廣。研習歲滋。先後著名。多從散落。歷代孤紹。非其效歟。試

言其由。略陳數意。

止如樂毅論。黃庭經。東方朔畫讚。太史箴。蘭亭集叙。告誓文。斯並代俗所傳。真行絕致者也。寫樂毅論。則情多。佛爵書畫讚。則意涉。瓌奇。黃庭經。怡懌虛無。太史箴。又從橫爭折。暨乎蘭亭與集。思逸神超。私門誠誓。情拘志慘。所謂涉樂方笑。言哀已歎。陳繹曾曰。喜怒哀樂。各有分數。喜則氣和而字舒。怒則氣鬱而字險。哀則氣澀而字劍。樂則氣平而字麗。情有重輕。則字之斂舒險麗。亦有淺深。變化無窮也。豈惟駐想流波。將貽暉暖之奏。馳神睢渙。方思漢繪之文。雖其目擊道存。尙或心迷議舛。莫不強名爲體。共習分區。如張融之對齊高。但恨一王無臣法。是矣。豈知情動形言。取會風騷之意。卜商詩。陽舒陰慘。本乎天地之心。既失其情理。乖其實原。夫所致安有體哉。

夫運用之方。雖由已出。規模所設。信屬目前。差之一豪。失之千里。苟知其術。適可兼通。心不厭精。手不忘熟。周顯宗曰。寫字之法。在心不在手。在手不在心。神則妙悟入。悟其所。以立規矩之意。故當在規矩爛熟之後。若運用盡於精熟。規矩閑於胸襟。自然容與徘徊。意先筆後。瀟灑流落。翰逸神飛。亦猶弘羊之心。預乎無際。庖丁之目。不見全牛。桑弘羊漢武時人。庖丁解牛。

丁解牛。出莊子。

嘗有好事。就吾求習。吾乃蠡舉綱要。隨而授之。無不心悟手從。言忘意得。縱未窮於衆術。斷可極於所臨矣。過庭書法。傳盧藏用。及尹元凱。皆有書名。若思通楷則。少不如老。學成規矩。老不如少。思則老而愈妙。學乃少而可勉。勉之不已。抑有三時。時然一變。極其分矣。至如初學分布。但求平正。既知平正。務追險絕。既能險絕。復歸平正。項穆曰。學書有三戒。初學分布。戒不均與欹。繼知規矩。戒不活與滯。終能純熟。戒不狂與俗。若不均與欹。驅或恬憺雍容。內涵筋骨。或折挫槎枿。外曜鋒芒。察之者尙精。擬之者貴似。解大神曰。臨書先儀。骨體。後追精神。側鋒內外之際。其力其筋。毫髮生成之妙。隨筆之功。既欠。豁然貫通。不知物我之有間也。況擬不能似。察不能精。分布猶踈。形骸未檢。躍泉之態。未觀其妍。窺井之談。已聞其醜。縱欲唐突義獻。誣罔鍾張。安能掩當年之目。杜將來之口。慕習之輩。尤宜慎諸。黃文獻曰。臨碑帖者。得其貌。似優子之學。柳下惠也。王氏書苑曰。唐人更不作草書。近有濟及洪都人。強學之。不堪位置。俗人未嘗知古人用筆處。遂謂張素復出矣。至有未悟淹留。偏追勁疾。不能迅速。翻效遲重。夫勁速者。超逸之機。遲留者。

賞會之致。將反其速。行臻會美之方。專溺于遲。終爽絕倫之妙。過庭此數語。亦行不掩言者也。書斷曰。過庭與王羲之相善。王則過於遲緩。此公傷於急速。使二子寬猛相濟。是為合矣。然遲速之間。大都筆性生成。趙宦光曰。蔡忠惠畫錦堂記。一字百易。必求合作。乃止。近得古本。李海州府君碑。以意其為。此如黃金鑄。范少伯。一鑄而就。止以速成。自喜。不復計工拙也。能速不速。所謂淹留。因遲就遲。詎名賞會。非夫心閑手敏。難以兼通者焉。心不熟不閑。手不熟不敏。假令衆妙攸歸。務存骨氣。骨氣存矣。而適潤加之。亦猶枝幹扶疎。凌霜雪而彌勁。花葉鮮茂。與雲日而相暉。右軍云。藏骨包質。書之至妙者也。潘瓘集曰。趙文敏嘗秋與賦。道美俊逸。而中藏鋒鏘。凛然與。如其骨力偏多。秋色一爭高。張懷瓘曰。質者如經。文者如緯。當以鍾張為後幹。二王為花葉。如其骨力偏多。適麗蓋少。則若枯槎架險。巨石當路。雖妍媚云關。而體質存焉。骨力之書。不必非妍。凡書有二種。老致。便是丰神。若適麗居優。骨氣將劣。譬夫芳林落蕊。空照灼而無依。蘭沼漂萍。徒青翠而奚託。黃庭堅曰。余在黔南時。書多纖麗。及移戎州。見舊書。可憎。十拙多於巧。近見少年作字。如新婦子梳梳。百種點綴。終無烈婦氣。是知偏工易就。盡善難求。雖學宗一家。而變成多體。李後主曰。善法書者。各得之一體。若虞世南。得其美韻。而失其後邁。歐陽詢。得其力。而失其秀。褚遂良。得其意。而失其變化。薛稷。得其清。而失於窘拘。顏真卿。得其筋。而失於體格。柳公權。得其骨。而失於生蕪。徐浩。得肉而失於俗。李邕。得氣而失其蘊藉態度。莫不隨其性欲。於體格。張旭得法而久。於狂。唯獻之俱得之。而失於驚急。不得其蘊藉態度。

便以為姿。質直者。則徑挺而不適。剛佞者。又崛強無潤。矜斂者。弊于拘束。脫易者。失於規矩。溫柔者。傷於軟緩。躁勇者。過於剽迫。狐疑者。溺於滯澁。遲重者。終於蹇鈍。輕瑣者。染於俗吏。斯皆獨行之士。偏翫所乖。趙孟堅曰。後主煜。讓魯公。為又手並脚田舍漢耳。然如褚河南。以八分古韻。一切尚之。甚有疎失。薛少保。發越精體。飄揚透徹。一向不回。幾致迂疎。又曰。魯公之正。固流為俗。誠懸之勁。亦失於寒。古往今來。中庸為難。易曰。觀乎天文。以察時變。觀乎人文。以化成天下。况書之為妙。近取諸身。假令運用未周。尚虧工於秘奧。而波瀾之際。已濬發於靈臺。必能旁通點畫之情。博究始終之理。鎔陶蟲篆。陶鈞草隸。體五材而並用。儀形不極。象八音之迭起。感會無方。文衡山曰。永師之書。不若右軍。八面變化。亦是功用未足之故耳。至若數畫並施。其形各異。衆點齊列。為體互乖。一點成一字之規。一字乃終篇之準。違而不犯。和而不同。留不常遲。遣不恒疾。帶燥方潤。將濃遂枯。泯規矩於方員。遁鈎繩於曲直。乍顯乍晦。若行若藏。窮變態於豪端。合情調於紙上。無間心手。忘懷楷則。自可背羲獻而無失。違鍾張而尚工。董道曰。書貴得法。然以點畫論法者。皆蔽於書者也。求法者。當於體用完備處。一法不立。而濃纖建快。

各當一譬。夫絳樹青琴，殊姿共豔。隋珠和璧，異質同妍。何必刻鶴圖龍，竟慚真體。得魚獲兔，猶恡空蹄。李日華曰。臨書如雙鳥並翔。各盡其致。不聞夫家有南威之容。必為三步驟之拘。非於書有深詣者不能也。乃可論淑媛。有龍泉之利。然後議於斷割。龍淵楚利劍名。龍淵楚利劍名。語過其分。實累樞機。

吾嘗靜思作書。謂為甚合。時稱識者。輒以引示其中巧麗。曾不留目。或有誤失。翻被嗟賞。既味所見。尤喻所聞。可或以年職自高。輕致陵誚。余乃假之以細

縹。題之以古目。則賢者改觀。愚夫繼聲。競賞豪末之奇。罕議鋒端之失。猶惠侯之好偽。梁虞蘇論書表云。羲之為會稽。獻之為吳興。故三吳之近地。偏多遺迹。又是末年道美之時。中世宗室諸王尚多。素嗜貴遊。不甚愛好。朝廷亦不搜求。人間所秘。往往不少。新渝惠侯。雅所愛重。懸金松買。不計貴賤。而輕薄之徒。銳意學。以茅屋漏汁。染變紙色。加以勞辱。使類久書。真偽相糅。莫之能別。故惠侯所蓄。多有非真。然招聚既多。時有佳迹。如獻之吳興二。足為同葉公之懼真。

莊子曰。葉公問高之好龍也。室屋雕文。畫以寫龍。於是天龍聞而下之。窺頭於牆。拖尾於堂。葉公見之。失其魂魄。是知伯子之息流波。蓋有由矣。溫伯雪子。因流俗波靡之習。明於禮義。而夫蔡邕不謬賞。孫陽不妄顧者。以其玄鑒精通。故不滯于耳目也。元章幾。秦龍子曰。唐滿詩。查晉不收。只云米跋。法帖卷尾。疎略甚多。僕於元章。慨然。古語有之。善緣。自不信。雙眸。而黃伯思法帖刊誤。又書不鑒。善鑒不書。又譏元章賞識之誤。故鑒書亦是難事。向使奇音在鑿。庸聽驚其妙

響。逸足伏櫪。凡識知其絕群。則伯嗜不足稱。伯樂未可尚也。至若老姥遇題扇。初怨而後請。門生護書几。父削而子慎。俱逸。少事。知與不知也。夫士屈於不知己。而伸於知己。彼不知也。曷足怪乎。故莊子曰。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。老子云。下士聞道。大笑之。不笑之則不足以為道也。豈可執冰而咎夏蟲哉。

自漢魏以來。論書者多矣。妍蚩雜糅。條目糾紛。或重述舊章。了不殊於既往。或苟興新說。竟無益於將來。徒使繁者彌繁。闕者仍闕。今撰為六篇。分成兩卷。第其工用。名曰書譜。庶使一家後進。奉以規模。四海知音。或存觀省。緘祕之旨。余無取焉。垂拱三年寫記。

姜夔續書譜

總論

真行草書之法。其源出於蟲篆。八分。飛白。章草等。圓勁古澹。則出於蟲篆。點畫波發。則出於八分。轉換向背。則出於飛白。簡便痛快。則出於章草。然而真草與行各有體製。歐陽率更顏平原輩。以真爲草。李邕西臺輩。以行爲真。亦古人有專工正書者。有專工草書者。有專工行書者。信乎其不能兼美也。丁真永草。鍾繇。隸奇。象象。八絕。

張芝草聖。俱或云。草書千字。不抵行草十字。行草十字。不如真書一字。意以爲草至易而真至難。豈真知書者哉。草書縱橫揮灑。觀者以爲易。真書一筆不苟。觀者以爲難。不書。而更深也。黃文獻曰。趙文敏用意。窮極精密。故其出而爲行草。縱橫曲折。無不妙契。古人。不。善學。者。下。筆。輒。務。爲。傾。側。之。勢。而。未。嘗。窺。其。用。意。處。是。以。愈。工。而。愈。不。及。也。珊瑚網曰。漢人始爲章草。草書之祖也。近世多尙行草。未始學真。而先習草。如三人未。能。立。而。欲。走。蓋。可。笑。也。況章草之來。作。於。科。斗。籀。篆。觀。其。運。筆。回。轉。用。意。深。妙。焉。有。不。通。篆。隸。而。能。學。者。哉。吳寬曰。鮮於困學多爲草書。然其書多從真行來。故落筆不苟。而點畫所至。皆有。意。態。使。人。觀。之。不。厭。非。若。今。之。未。識。歐。虞。徑。造。顧。素。其。散。漫。連。延。之。勢。終。爲。飛。蓬。蔓。草。而。已。大抵下筆之際。盡做古人。則少神氣。專務適勁。則俗病不除。所貴熟習精通。心手相應。斯

爲美矣。白雲先生歐陽率更書訣。亦能言其梗槩。白雲訣雲。陽氣明。則華壁立。陰氣太。則風神生。把筆抵毫。肇乎本性。力圓則潤。勢疾則澀。緊則勁險則峻。內貴。盈外貴。虛。起不孤。伏不寡。迴仰非近。背接非遠。望之。惟。逸。發之。惟。靜。歐陽書訣。已存第五卷。孫過庭論之又詳。可恭稽之。

真書

真書以平正爲善。此世俗之論。唐人之失也。方圓平直。書之規矩也。唐人作書。規矩極嚴。字樣。大都相似。自誠懸以後。法益峭刻。而晉賢之風神逸態。掃地無餘矣。故曰。唐人之失。竟章係。番陽布衣。其書本逸野而講。唐推晉。又宋賢好尙如此。古今真書之神妙。無出鍾元常。其次則王逸少。今觀二家之書。皆瀟灑縱橫。何拘平正。良由唐人以書判取士。而士大夫字書。類有科舉習氣。顏魯公作千祿字書。是其證也。千祿四聲。分。部。小。楷。有。註。辨。別。正。俗。及。所。通。用。一。間。有。析。其。義。老。公。書。刻。於。大。曆。九。年。一。矧。歐。虞。顏。至。開。成。中。字。已。訛。闕。工人以爲衣食之資。故也。今稽歐陽集古錄所藏。亦楊漢公摹本。矧歐虞顏柳前後相望。故唐人下筆。應規入矩。無復魏晉飄逸之氣。且字之長短大小。斜正疎密。天然不齊。孰能一之。謂如東字之長。西字之短。口字之小。體字之大。朋字之斜。黨字之正。千字之疎。萬字之密。畫多者宜瘦。少者宜肥。魏晉書法之高。良由各

盡字之真態。不以私意參之耳。促小展大。前輩亦譏唐人失之。若疎密長短等類。無不譏矣。或者專喜方正。極意歐顏。或者惟務勻圓。專師虞永。或謂體須稍扁。則自然平正。此又有徐會稽之病。或云欲其蕭散。則自不塵俗。此又有王子敬之風。豈足以盡書法之美哉。或問李西臺曰。右軍八面變化。而永師不逮何也。曰。偏也。或曰。永師極正矣。曰。非此之論。凡書必有輕重大小。長短疎密。斜正開闔。向背順逆。方圓平直。偏一處。便缺一處。真書用筆。自有八法。我嘗采古人之字。列之以為圖。今略言其指。點者。字之眉目。全藉顧盼精神。有向有背。隨字異形。橫直畫者。字之體骨。欲其堅正勻靜。有起有止。所貴長短合宜。結束堅定。ノ一者。字之手足。伸縮異度。變化多端。要如魚翼鳥翅。有翩翩自得之狀。乚挑剔者。字之步履。欲其沉實。晉人挑剔。或帶斜拂。或橫引向外。至顏柳始正鋒為之。正鋒則無飄逸之氣。轉折者。方圓之法。真多用折。草多用轉。折欲少駐。駐則有力。轉不欲滯。滯則不適然。而真以轉而後適。草以折而後勁。不可不知也。懸針者。筆欲極正。自上而下。端若引繩。若垂而復縮。謂之垂露。故翟伯壽問於米老曰。書法當何如。米老曰。無垂不縮。無往不收。此必至精

至熟。然後能之。已上俱詳。運筆卷一。古人遺墨。得其一。點一畫。皆昭然絕異者。以其用筆精妙。故也。大令以來。用筆多尖。仰筆尖鋒。書之忌也。蔡君謨曰。學大令者。多致放失。而義之投筆處。便有神妙。王世貞曰。太令以降。若永施之書。學差勝筆。旭素之書。筆多學少矣。一字之間。長短相補。斜正相拄。肥瘦相混。求妍媚於成體之後。至於今尤甚焉。長短斜正。必錯綜以出。乃唐法也。唯肥瘦不宜太雜。然此節弊病。今之人殆甚於宋。

用筆

用筆不欲太肥。肥則形濁。又不欲太瘦。瘦則形枯。不欲多露鋒芒。露則意不持重。不欲深藏圭角。藏則體不精神。不欲上大下小。不欲左高右低。不欲前多後少。歐陽率更結體太拘。而用筆特備衆美。王弼州曰。率更搜得羲之數畝之。指歸圖。以書譜曰。陳景元與蔡卞論古今書法。至歐陽詢。則曰。世皆知其體方。而不知其筆圓。十頗服膺以為得旨。雖小楷而翰墨灑落。追蹤鍾王。來者不能及也。過庭在唐而譜晉。標鍾王為真書之的。幾章在宋而譜唐。推率更以接鍾王之派。顏柳結體既異。古人用筆復溺於一偏。予評二家為書法之一變。數百年間。人爭效之。字畫剛勁高明。固不為書法之無助。而晉魏之風軌則掃地矣。寶晉齋曰。真禪學。精途良。既成。是以挑踢名家。家用太多。無不滄天。成之趣。王弼州曰。大達法師塔文。柳

書之最露筋骨者。迥矚勁健。然柳氏大字偏旁。清勁可喜。更為奇妙。近世亦有仿效之者。則俗濁不除。不足觀。故知與其太肥。不若瘦硬也。李西臺書。肥不刺肉。如美女豐肌。而神氣清秀。發歐陽文忠用尖筆乾墨。作方潤字。而神彩秀發。青澤無窮。後人如見其清眸豐頰。故出自名手。肥瘦各有妙趣。惟學勿能至。則肥者尤易俗耳。

草書

草書之體。如人坐臥行立。揖遜忿爭。乘舟躍馬。歌舞擗踊。一切變態。非苟然者。索靖草書狀曰。或若登高望遠。其類或若既往而中顧。或若傲儒而不詳。或若自檢於常度。或欲束而相抱。或婆娑而四垂。或橫翦而齊整。或上下而參差。或陰峯而高舉。或落筆而自坡。其布好施媚。如明珠之陸離。其發翰擡藻。如春華之揚枝。其提墨縱體。如美女之長眉。其滑澤有易。如長溜之分岐。其骨梗強壯。如柱礎之丕基。其斷除窮盡。如工匠之盡規。其芒角吟牙。如嚴霜之傳枝。衆巧百態。無不奇。又一字之體。率有多變。有起有應。如此起者。當如此應。各有義理。以抽者順應。以威勢一起者逆應。以側勢一起者反應。凡此各有義理。右軍書義之字。當字得字。慰字最多。多至數十字。無有同者。而未嘗不同也。可謂所欲不踰矩矣。草書變則盡態。如驚沙自飛。孤蓬自振。與右軍小楷。意態各帖不同。蘭亭十九个之字。便是十九个轉換。若千字一同。有何生趣。東坡譏釋子書。曰。經凡幾品。品凡幾個。倘為幾句。句為幾字。字為幾畫。其數無量。而若造字法平等若。一無高下大小輕重。於其間也。大凡學草書。先當取法張芝。皇象。索靖。章草等。則結體平正。下筆有

源

皇象急就章。規模簡古。氣象沈遠。其書神識碑。若隸字勢雄偉。官本惟載文武將墜四帖。他處更嘗見索靖碑石。觀之數步復返。及坐宿其傍。三日乃去。張芝師崔杜之法。皆精。然後倣王右軍。申之以變化。鼓之以奇崛。書斷曰。右軍備精諸體。自成一家法。千變萬化。得之神功。芝之體。而為行草。獻之嘗白父云。古之章草。未能宏逸。頓異真體。合窮僞略之理。極草縱之致。不若漢行之間。於往法固殊也。大人宜改。若泛學諸家。則字有工拙。筆多失誤。當連者反斷。當斷者反續。不識向背。不知起止。不悟轉換。隨意用筆。任筆賦形。失悞顛錯。反為新奇。自大令以來。已如此矣。況今世哉。大令謂齊梁間人。咸稱祖述蕭王。無妨訛謬之說。宋時草書。如翟次山。張商英輩。亦惟務狂。旭素以後。斯藝杳然絕響。然而襟韻不高。記憶雖多。莫湔塵俗。若風神蕭散。下筆便當過人。自唐以前。多是獨草。不過兩字屬連。累數十字而不斷。號曰連綿游絲。此雖出於古人。不足為奇。更成大病。趙壹非曰。書心與手。豈可勉強為哉。昔者西施善擊。里婦祇增其醜。趙女善舞。行步媚。學者在。弗獲失。節旬旬書草變化。全在規矩爛熟。若但搜摘奇異。學作連綿。豈成書法。古人作草。如今人作真。何嘗苟且。其相連處。特是引帶。嘗考其字。是點畫處皆重。非點畫處偶相引帶。其筆皆輕。趙宣光曰。行書草草。以主客分明引帶不雜為格律。雖復變化多端。而未嘗亂其法度。

張顛懷素規矩最號逸野。而不失此法。東觀餘論曰。始觀張旭所書千字文。至母圖隸散等字。怪逸過甚。好事者以長史喜狂書。遂效其蹟。返覆徐觀。至鴈門云亭。愚蒙瞻仰等。與後題月日。則維隱軒舉。棧枅絲縷。千變萬狀。而左馳右駕。不離規矩繩墨之外。王弼州云。素書絹本千文。圓熟豐美。大要從山陰派來。而兼有李懷琳孫過庭結法。

近代山谷老人。自謂得長沙三昧草書之法。至是又一變矣。

山谷紹聖二年謫黔。獲觀藏真自序。遂契其妙。

自謂得長沙三昧草書之法。故自紹聖以後。其書連綿不絕。然擬藏真所書。或不免於緣木乾谷矣。懷素長沙僧。素嘗自言得草聖三昧。流至於今。不可復觀。

唐太宗云。行行如縈春蚓。字字如縮秋蛇。惡無骨也。大抵用筆有緩有急。有有鋒。有無鋒。有承接上字。有牽引下字。乍徐還疾。忽往復收。緩以效古。急以出奇。有鋒以耀其精神。無鋒以含其氣味。橫斜曲直。鈎環盤紆。皆以勢為主。然不欲相帶。帶則近俗。橫畫不欲太長。長則轉換遲。直畫不欲太多。多則神癡。以捺代。如指按物而捺之。不必以發代。是發波之發。草訣所謂。是亦以捺代。惟ノ則間用之。意盡則用懸針。意未盡須再生筆意。不若用垂露耳。

用筆

用筆如折釵股。如屋漏痕。如錐畫沙。如壁坼。此皆後人之論。折釵股。欲其曲折

圓而有力。屋漏痕。欲其橫直勻。而藏鋒。錐畫沙。欲其無起止之跡。壁坼者。欲其無布置之巧。然皆不必若是筆正則鋒藏。筆偃則鋒出。一起一倒。一晦一明。而神奇出焉。常欲筆鋒在畫中。則左右皆無病矣。故一點一畫皆有三轉。一波一拂。皆有三折。一ノ又有數樣。一點者。欲其與畫相應。兩點者。欲自相應。三點者。必有一點起。一點帶。一點應。四點者。一起兩帶。一應。筆陣圖云。若平直相似。狀如算子。便不是書。如口當行草時。尤宜泯其稜角。以寬閑圓美為佳。心正則筆正。意在筆前。字居心後。皆名言也。故不得中行。與其工也。寧拙。與其弱也。寧勁。與其鈍也。寧速。然極須淘洗俗姿。則妙處自見矣。大抵執之欲緊。運之欲活。不可以指運筆。當以腕運筆。執之在手。手不主運。運之在腕。腕不主執。又作字者。亦須略考篆文。須知點畫來歷先後。如左ノ右ノ之不同。刺勒刺勒之相異。王之與玉。王示前之與衣。今以至奉齋泰齋春高秦龔形同體殊。得其源本。斯不浮矣。

孫過庭有執使轉用之法。執爲長短淺深。使爲縱橫牽掣。轉爲鈎環盤紆。用爲點畫向背。豈苟然哉。

用 墨

凡作楷欲乾。然不可太燥。行草則燥潤相雜。以潤取妍。以燥取險。墨濃則筆滯。燥則筆枯。亦不可不知也。以墨之濃淡乾濕。取媚於字。柳宗元之習也。趙希鵠云。古人晨起。則濃磨墨汁。滿硯池。以供一日之用。用不盡。則棄之。來早再作。硯池必大而深。故書皆澗潤。行草過筆處。雖如絲髮。其墨亦濃。今人多尙渴筆。蓋非古也。筆欲鋒長勁而圓。長則含墨。可以取運動。勁則剛而有力。圓則研美。或云。善書者不擇筆。有或云。歐虞不擇筆。余未之信也。米海嶽所使者有宛轉如意者。輒割之。取其精毫。別貯之。每萃三管之精。令工總縛一管。眞草巨細。投之無不可也。抑且古人用筆。亦各不同。如蕭何秃筆。子雲胎髮筆。歐陽通理心兔盞象牙筆。王羲之鼠鬚筆。白樂天雞距龜毛筆。懷素束心筆。王著散卓筆。蔡君謨米尾鼠鬚筆。蘇東坡雞毛筆。諸賢好尚如此。豈得不擇耶。韋仲將筆法曰。以鐵梳梳兔毫。及青羊毛。去其穢毛。正毫齊其鋒端。各作扁。極令勻調。平好。用衣青羊毛。羊毛去兔毫頭。下二分許。然後合扁卷。令極固痛頓。爲住。筆心寧小不宜大。王羲之筆經曰。諸郡獻兔毫。鴻都門。惟有趙國毫。中用。趙國平原廣澤。無雜草木。惟有細草。是以兔毫毫長而銳也。須秋仲月收之。孟秋去夏近。毫集而嫩。季秋去冬近。毫脆而禿。惟八月寒暑調。乃用。毛杪合鋒。令長九分。管脩二握。須圓正方可。余嘗自爲筆。甚可用。謝安石庾稚恭就我求之。斬予嘗評世有三物。用不同而理相似。良弓引之則緩來。舍之則急往。世俗而不與。予嘗評世有三物。用不同而理相似。良弓引之則緩來。舍之則急往。世俗

謂之揭箭。好刀按之則曲。舍之則勁直如初。世俗謂之回性。筆鋒亦欲如此。若一引之後。已曲不復挺之。又安能如人意邪。故長而不勁。不如弗長。勁而不圓。不如弗勁。紙筆墨皆書法之助也。

行 書

嘗夷考魏晉行書。自有一體。與草書不同。大率變眞以便於揮運而已。草出於章。行出於眞。雖曰行書。各有定體。縱復晉代諸賢。亦不相遠。蘭亭記及右軍諸帖第一。張懷瓘曰。逸少行書。動合規模。謝安石。大令諸帖次之。謝安石學書。右軍云。者尤難。張懷瓘曰。子敬不能純一。或行草雜糅。顏柳蘇米。亦後世之可觀者。大要以筆老爲貴。少有失悞。亦可輝映。藝苑卮言。稱夏公謹之書。肥過而滯。老過而稚。肥而爲帶。人所共曉。老而爲稚。識者當能辨之。不若中行爲妙。所貴乎穠纖間出。血派相連。筋骨老健。風神灑落。姿態備具。眞有眞之態度。行有行之態度。草有草之態度。必須博學。可以兼通。

臨 摹

摹書最易。唐太宗云。臥王濛於紙中。坐徐偃於筆下。亦可以嗤蕭子雲。唯初學者不得不摹。亦以節度其手。易於成就。皆須古人名筆。置之几案。懸之座右。朝夕諦觀。思其用筆之理。然後可以摹臨。岳珂曰。臨摹兩法。本不同。摹帖如三祥人作室。梁

臨帖如雙鴻並翔。青天浮雲浩蕩萬里。各遂其所。至而息焉。其次雙鉤蠟本。須精意摹搨。乃不失位置之美耳。蘇軾王會稽父子書。存於世者。蓋一二數。其次褚薛之流。硬黃臨做。亦足為貴。硬黃者。嫌紙性終帶暗澹。置之熱熨斗上。以黃蠟塗勻。紙雖稍硬。而登澈透明也。若古本色暗硬黃。不能取。則以蠟搨取之。其法坐暗室中。穴牖如。臨書易失。古人位置。而多得古人筆意。摹書易得。古人位置。而多失。古人筆意。臨書易進。摹書易忘。經意與不經意也。夫臨摹之際。

豪髮失真。則神情頓異。所貴詳謹。東觀餘論曰。近世翰林侍書輩。多學聖教序。學勿能至。了無高韻。因自目其書為院體。由唐吳通微昆弟。已有斯目。故今士大夫玩之者絕少。然學世有蘭亭。何啻數百本。而定武為最佳。然定武本有數樣。今取諸本參之。其位置長短大小。無不同。而肥瘠剛柔工拙要妙之處。

如人之面。無有同者。蘭亭叙。在唐貞觀中。舊有二本。俱刊玉石。其一入昭陵。其一當神龍中。太平官王借出。搨摹遂亡。其後溫緄發諸陵。蘭亭復出。宋世流落定武民間。世以定武本為貴。薛道祖守定武。別刊一本。易民間本。道祖家長安。自是以長安薛家本為貴。道祖又留刊一石。在使字。留刊一石。在誰門。計之民間所易。一后。只定武自有三

本。皆道祖摹本也。其貞觀舊本。背後有五色蓮花記。自道祖沒後。其弟嗣昌奏之。宣和間取歸汴京。龜在宣和殿上。靖康末載。與岐陽石鼓並入沙漠。以此知定武雖石刻。又未必得真蹟之風神矣。字。書全以風神超邁為主。刻之金石。其可苟哉。雙鉤之法。須得墨暈不出字外。或郭填其內。或朱其背。正得肥瘦之本體。東觀餘

米芾摹少平章帖。筆趣翩翩。固自佳。但肆筆橫放。殊不填郭。非古法也。昔人搨言欲如水月鏡像者。故應郭填乃造微耳。郭填者。雙鉤其郭。乃以墨填其中也。朱背者。赤以古帖字間。故朱字之背面。使雖然。尤貴於瘦。使工人刻之。又從而刮治之。則瘦者亦變而肥矣。即用舊帖。鈎丹上石。尤貴於瘦。或云。雙鉤時須倒置之。則無容私意於其間。誠使下本明上紙薄。倒鉤何害。若下本晦。上紙厚。却須能書者為之發其筆意可也。夫鋒芒圭角。字之精神。大抵雙鉤多失。此又須朱其背時稍致意焉。李日華曰。學書當擇古人百

白而學之。至妙之論也。

方 圓

方圓者。真草之體用。真貴方。草貴圓。方者參之以圓。圓者參之以方。斯為妙矣。章草體方而用圓。書之至高者也。真書若鍾王以下。虞永諸帖。要皆筆意渾意渾涵。圓而得動。然而方圓曲直。不可顯露。直須涵泳一出。

於自然。如草書尤忌橫直分明。橫直多則字有積薪束葦之狀。而無蕭散之氣。
索靖曰。芝草蒲陶還相結。棠隸融融。載其華。其氣象豈不茂美耶。 時參出之。斯為妙矣。

向背

向背者。如人顧盼指畫相揖相背。發於左者應於右。起於上者伏於下。大要點畫之間。施設各有情理。求之古人。右軍蓋為獨步。

位置

假如「立人挑土田王示衣」一切偏旁。皆須令狹長。則右有餘地矣。在右者亦然。不可太密太巧。太密太巧者。是唐人之病也。
文徵明曰。漢魏人書。醇古簡靜。深不可測。晉宋以來。風度相高。如雅人勝士。蕭灑韻籍。有出塵之想。陵遲至於中唐。法度森然。斯須不失。而醉古之風已斬。蕭疎之意已拘。良以古人作書。意勝於法。唐人法勝於意。不爾。人尋味耳。 假如口字在左者。皆須與上齊。「嗚呼喉嚨」等字是也。在右者皆須與下齊。「和扣」等字是也。又如「一」頭須令覆其下。「走走」皆須能承其上。審量其輕重。使相負荷。計其大小。使相副稱為善。

踈密

書以踈欲風神。密欲老氣。
踈欲風神。如揚升華所。謂放筆增毫。未骨備美。如盧柟下朝。從容。蜜欲老氣。李季海近之。山谷曰。季海暮年。乃更擺落。王氏規模。自成一家。所謂虛運其髮短。其心甚長。惜乎當時君子。莫能以短兵伐此老賊也。 如佳之四橫。川之三直魚之四點。畫之九畫。必須下筆勁淨。踈密停勻為佳。當踈不踈。反成寒乞。當密不密。必至彫踈。

風神

風神者。一須人品高。
郝經曰。李斯刻薄寡恩人也。故其書如屈鐵無情。鍾繇嚴厲沉鬱威重人也。故其書勁利方重。如畫劍累鼎。斬絕深險。義之真正。有識鑒。風度高遠。觀其遺。殷浩及道子諸人書。不附恒溫。自放山水間。與物無競。為江左品流第一。故其書以韻勝。適麗虛婉。出奇入神。不失其正。高風絕跡。邈不可及。顏魯公以忠義大節。極古今之正。授篆入階。蘇軾以雄文大筆。極古今之變。以楷用隸。皆以人品為本。其書法。即其心法也。黃山谷曰。胸中有數千卷。不隨世碌碌。則書不病。病自勝。李西臺。林和靖。蓋美而病。病者。王著。勁而病。病者。周越。皆渠儂胸次之罪。非學者不工也。又曰。東坡之書。學問文章之氣。鬱鬱芊芊。發於筆墨間。故他人所不及。在昔叔夜妙於草製。體勢得之自然。若高逸之士。雖在布衣。有傲然者。故臨不測之水。使人文神清。二須師法古。
書法攷曰。王右軍過江。觀覽名刻。歎學。衛夫人書。徒登萬仞之囑。自然意遠也。費歲月。故學書者。先當知所宗。尚乃知所用力。 三須筆紙。
古人習書。雖有不盡費紙筆者。如徐伯珍之書。若葉。鄭虔之書。柿葉。懷素之書。芭蕉葉。任未之削。荆陶景之剪。歐陽通之畫。沙。以及砥掌。測石。畫地。書空。

要其用_工如_此若僧度得_銀光之紙_子四須險勁。以上三項當預於未書之前。此下五項學書次第如_此。書以_骨幹_為先。故險勁當_為第一。五須高明。英爽之氣也。有_骨而後有_氣。六須潤澤。肌膚也。有_骨氣。而後有_{肌膚}及_血脈也。七須向背得宜。制節如_人四體。既正。膚革盈寧而後揖讓進退。周旋中規。折旋中矩也。八須時出新意。有_推而進。有_放而文。又其妙也。自然長者如秀整之士。短者如精悍之徒。瘦者如山澤之癯。肥者如貴遊之子。勁者如武夫。媚者如美女。欹斜如醉仙。端楷如賢士。各隨_書性。造_就一家。

遲速

遲以取妍。速以取勁。先必能速。然後為遲。若素不能速。而專事遲。則無神氣。若專務速。又多失勢。

筆勢

下筆之初。有搭鋒者。有折鋒者。其一字之體。定於初下筆。凡作字第一字。多是折鋒。第二三字。承上筆勢。多是搭鋒。承_上多是搭鋒。行草有_之楷法須各自立勢。若一字之間。右邊多是折鋒。應其左故也。左過_右右過_左上過_下下過_上俱用_逆折而入。唯_備點。備點。備畫之類。但取_順勢。用_之折搭無_一定也。又有平起者。

如隸畫。藏鋒者如篆畫。大要折搭多精神。平藏善含蓄。兼之則妙矣。王弼州曰。余嘗謂象文

武。索靖藏妖帖。章草中鳥跡筆者。顏真卿家廟茅山碑。正書中玉筋筆者。蘭臺道因碑。正書中八分筆者。未_易為_俗人言也。

性情

藝之至未始不與精神通。其說見於昌黎送高閑序。孫過庭云。一時而書有乖有合。合則流媚。乖則彫疎。神怡務閑一合也。感惠徇知二合也。時和氣潤三合也。紙墨相發四合也。偶然欲書五合也。恐遽體留一乖也。意違勢屈二乖也。風燥日炎三乖也。紙墨不稱四乖也。情怠手闌五乖也。乖合之際。憂劣互差。

血脈

字有藏鋒出鋒之異。粲然盈楮。欲其首尾相應。上下相接為佳。後學之士。隨所記憶。圖寫其形。未能涵容。皆支離而不相貫穿。婁堅曰。字畫小技。然而不_精研。則心與_法不_相入。何山通_微。不_積習。則手與_心不_相應。何由造_妙。師法須_高。骨力須_重。已識_其源。雖_師心而暗合。強摹_其迹。縱肖_貌而寔乖。黃庭小楷。與樂毅論不同。東方朔畫讚。又與蘭亭記殊旨。一時下筆。各有其勢。固應爾也。余嘗歷觀古之名書。無

不點畫振動。如見其揮運之時。山谷云。字中有筆。如禪句中有眼。豈欺我哉。
山谷頌李西臺語也。

書丹

筆得墨則瘦得朱則肥。故書丹尤以瘦為奇。而圓熟美潤常有餘。燥勁老古常不足。朱使然也。
不獨朱之故。蠟亦甚滑。不能留鋒。廻指處筆心多不能聚。須選羊毫半兼花毫。尖鋒筆用之。自妥。若用純毫筆。則類如指頭矣。欲刻者不失真。未有若書丹者。
三代有碑而無銘。禮記屬於碑。是也。秦始有銘。建而後書。蔡邕石古字。然書時盤薄不無少勞。韋仲將升高書。凌雲臺榜。下則鬚髮已白。藝成而下。斯之謂歟。若鍾繇李邕。又自刻之。可謂癖矣。
魏受禪表。黃初元年。立文帝廟。王朗文。梁鶴書。鍾繇鑄字。謂之三絕。李邕書碑。亦多自刻之。每歎黃鶴仙。伏靈芝元省已者。俱無其人。邕托名也。又聞海嶽亦自刻之。戴元表曰。古之書家。莫不能刻。謂之書刀。

大正十四年十一月五日印刷
大正十四年十一月十日發行

【非賣品】



不許複製

著者 澁川柳次郎

發行者 立川雷平

印刷者 猪木卓二

東京市麻布區筭町百廿六番地

東京市麴町區飯田町二ノ五〇

東京市麻布區筭町百二十六番地

發行所 立耳叢書刊行會

振替東京四〇四三五番

澁川玄耳著

(最新刊)

書道神品百碑

特製大冊	定價拾五圓
送	市内拾二錢
料	地方四五錢
	滿韓七四錢

本書は書法の標準とすべき一百の古碑を選び、各其一部を原物大に複寫し其由來意義を解説し、更に數百種の鐘鼎、泉布、瓦當、印璽、法帖等を用對照する、上下四千年支那文字の縮圖、一覽表、書道の手引、捷徑、大辭典とも謂ふ可く、新規にして便利な現代的要求を充たした編纂である。

東京市麻布區筭町一二六

玄耳叢書刊行會

(内容見本御申越次第無代贈呈)

527

60₂

終

